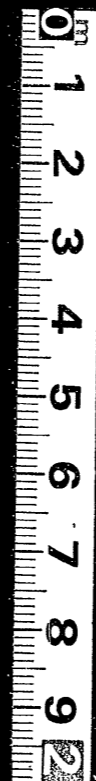
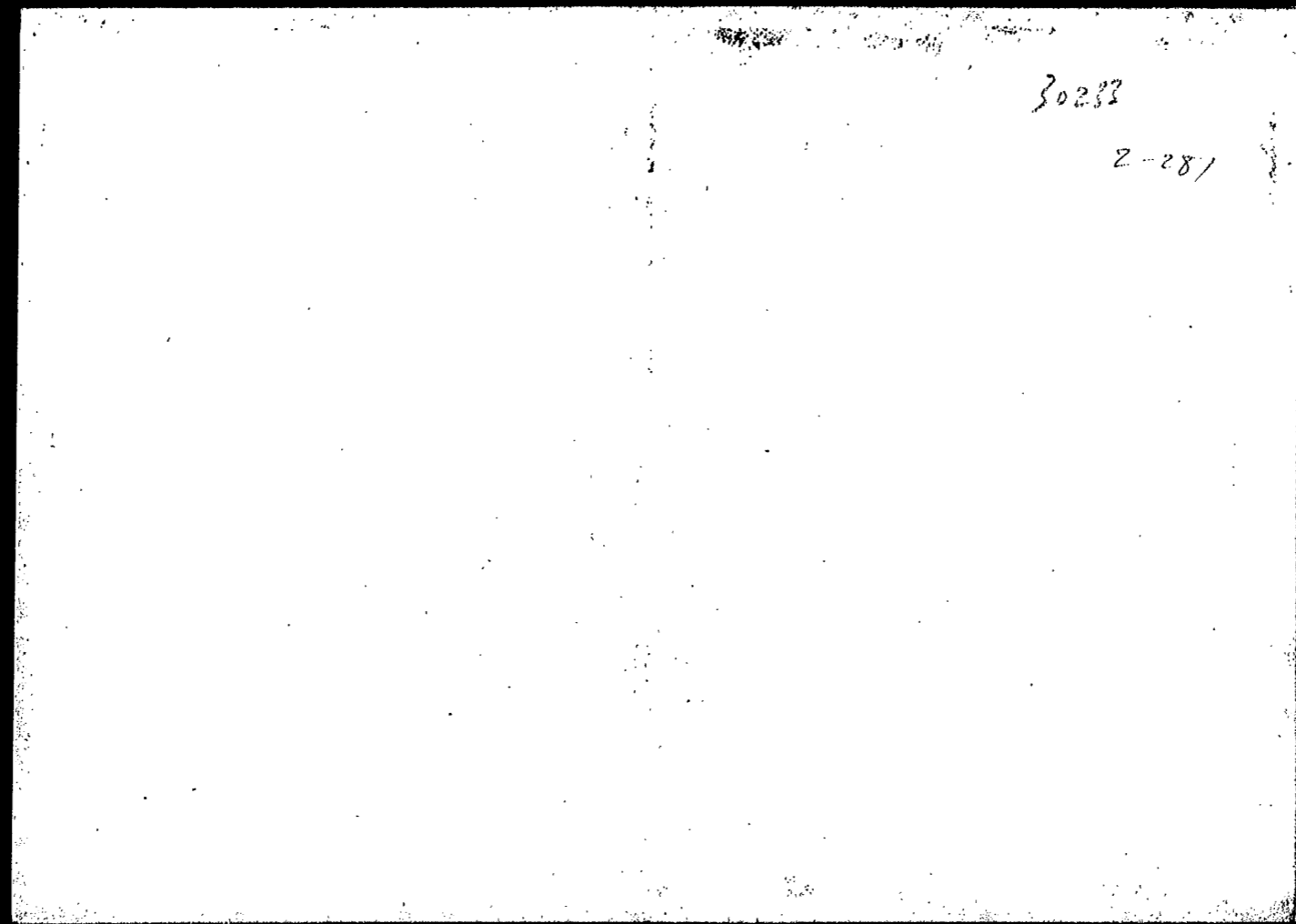




35
302
1





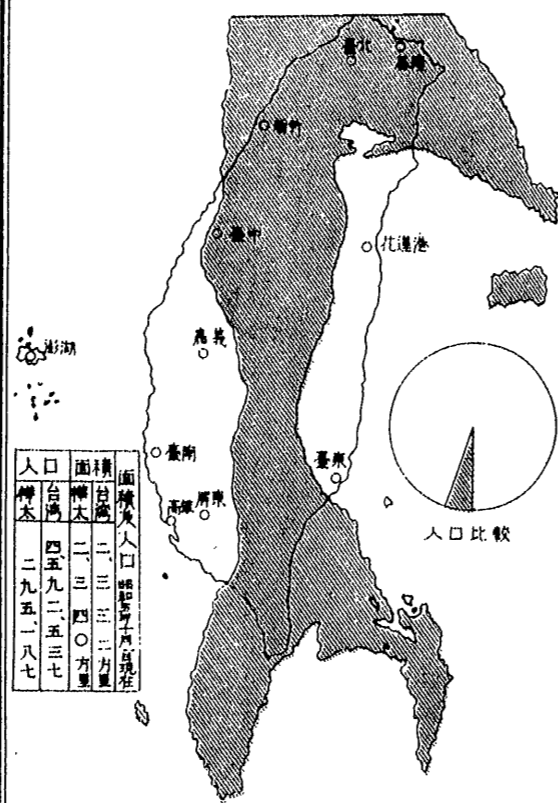
30233

2-281

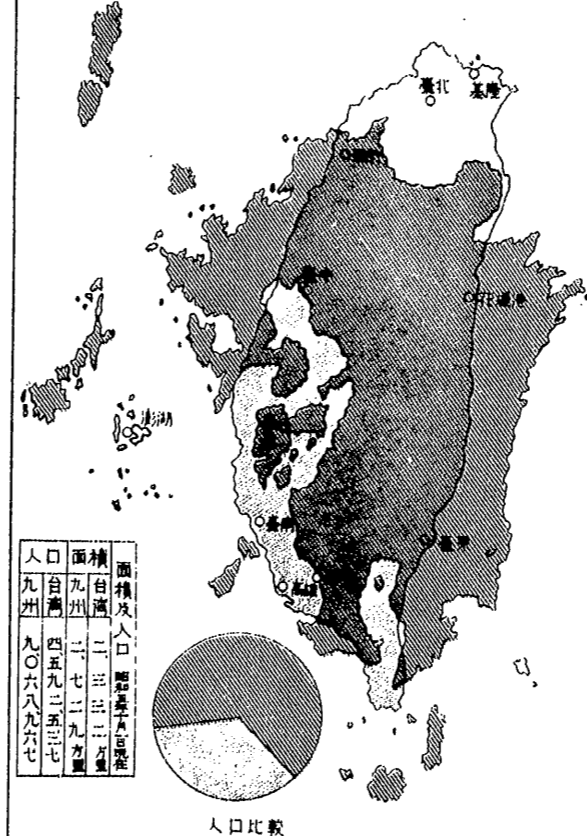
352
20233
16

臺灣現勢要覽

II 臺灣及樺太面積並人口比較

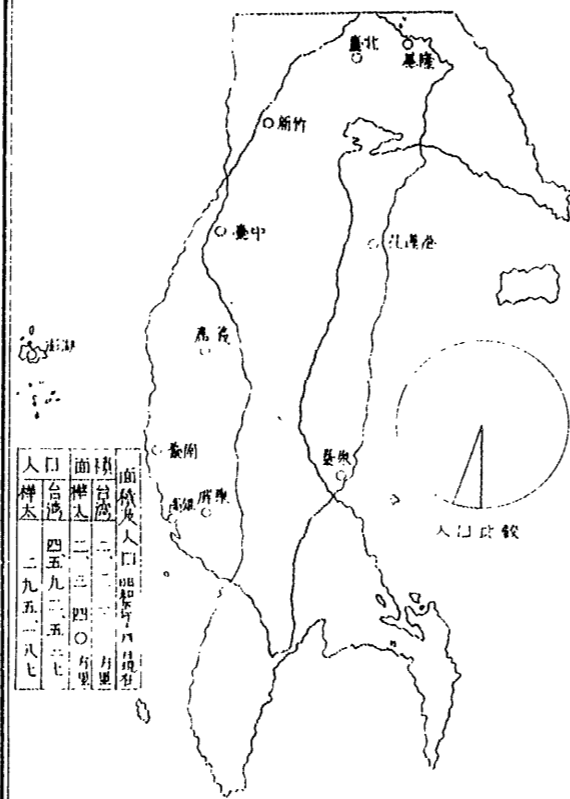


I 臺灣及九州面積並人口比較

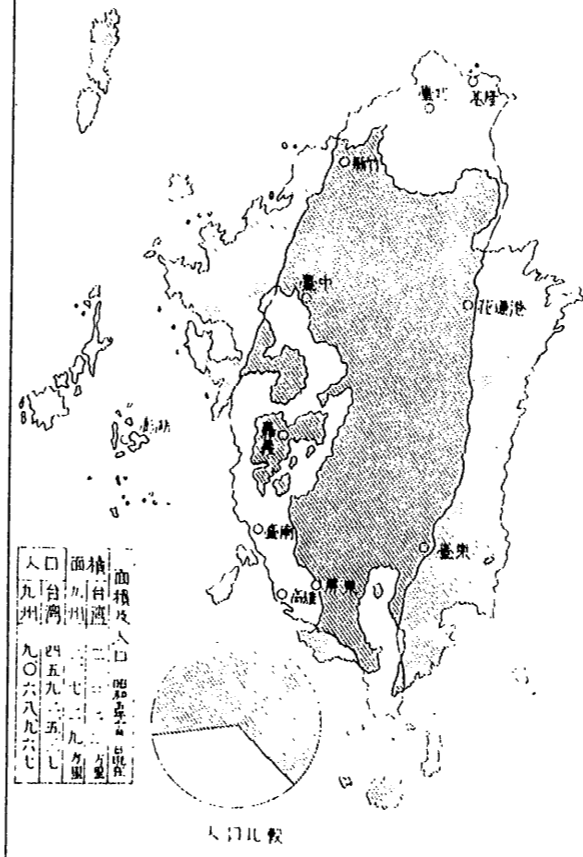


露光量違いにより重複撮影

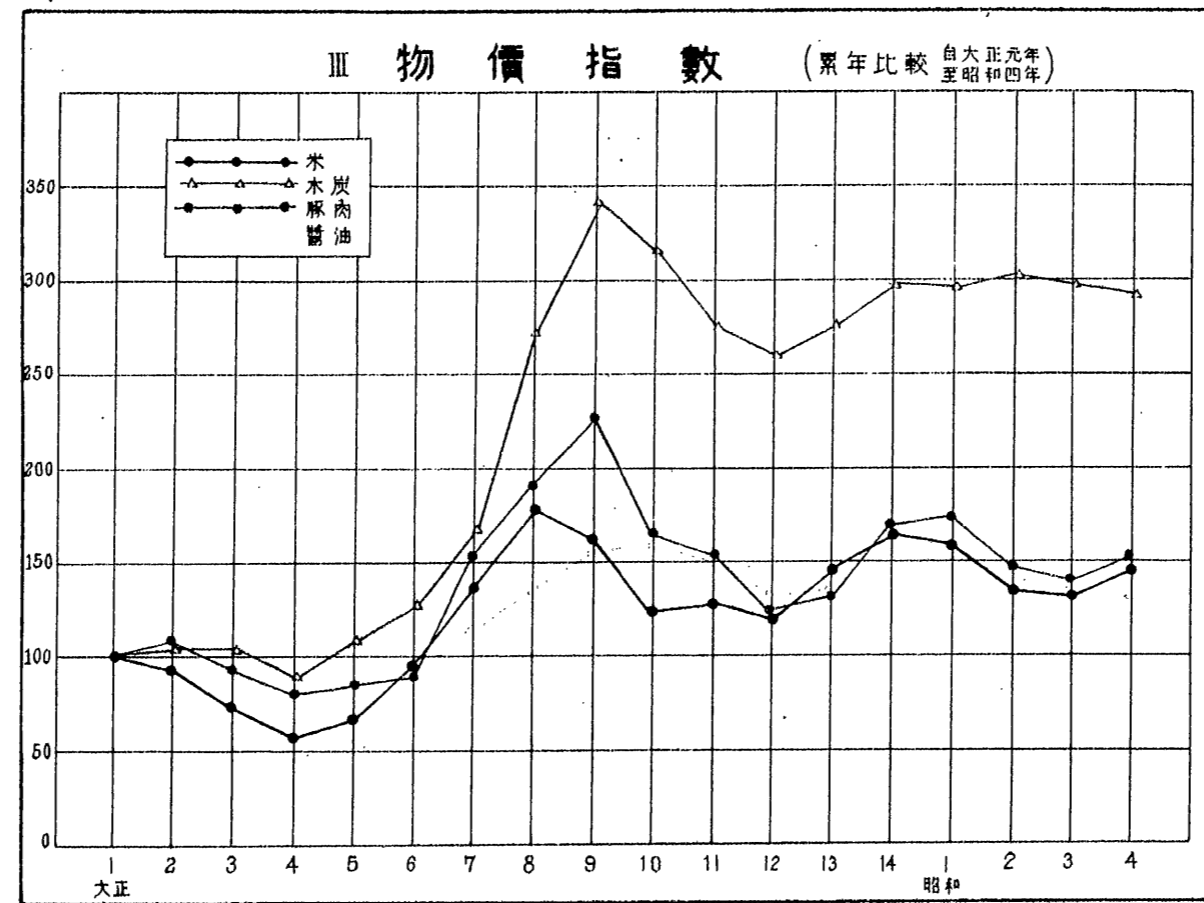
II 臺灣及樺太面積並人口比較



I 臺灣及九州面積並人口比較



露光量違いにより重複撮影



凡 例

- 一 本書は、臺灣の現勢を知るの便に資せんが爲、主要なる事項に就て、その統計的説明を試みたるものなり。
- 二 本書は、昭和四年の事實を基礎としたるも、その最近の統計あるものは努めて之を採り、又昭和四年の事實不明のもの若は特に必要と認めたるものは、昭和四年以前の統計をも採りたり。
- 三 本書は、主として臺灣の現勢を知るを目的とするも、特にその變遷進歩の狀態を説明するの必要ある事項に就ては、累年の統計をも掲げたり。
- 四 本書は、帝國に於ける臺灣の地位を説明するの便に供せんが爲、その必要なる事項に就ては、内地府縣、北海道、朝鮮、樺太、關東州等との比較對照をも試みたり。

昭和六年七月

臺灣總督府

臺灣現勢要覽目次

一	位置	一
二	面積	一
三	山嶽	一
四	河川	一〇
五	土地の利用	三
六	氣温	三
七	雨量	三
八	人口	七
九	本籍別内地人	三
一〇	在外臺灣人	三
一一	在留外國人	六
一二	臺灣語を話す内地人	三
一三	國語を解する本島人	三
一四	婚姻・離婚・出生及死亡	三
一五	出生率	三
一六	死亡率	三
一七	人口の増加	三

一八	審人
一九	行政區劃
二〇	州及廳の面積
二一	州及廳の人口
二二	主要都市
二三	農業者數
二四	耕地面積
二五	水利
二六	農産
二七	畜産
二八	林産
二九	礦産
三〇	水産
三一	工業
三二	糖業
三三	貿易
三四	對手國別外國貿易
三五	對手國別外國貿易
三六	對手國別外國貿易
三七	對手國別外國貿易
三八	對手國別外國貿易
三九	對手國別外國貿易
四〇	對手國別外國貿易
四一	對手國別外國貿易
四二	對手國別外國貿易
四三	對手國別外國貿易
四四	對手國別外國貿易
四五	對手國別外國貿易
四六	對手國別外國貿易
四七	對手國別外國貿易
四八	對手國別外國貿易
四九	對手國別外國貿易
五〇	對手國別外國貿易
五一	對手國別外國貿易

三七	重要品別内地貿易
三八	港別貿易
三九	財政
四〇	專賣
四一	銀行
四二	物價
四三	教育
四四	衛生機關
四五	水道
四六	ベストとマラリア
四七	阿片吸食特許者
四八	鐵道
四九	郵便、電信、電話
五〇	警察官署及職員
五一	最近十八年間の進歩
I	臺灣及九州面積並人口比較
II	臺灣及樺太面積並人口比較
III	物價指數

臺灣現勢要覽

一 位置

臺灣は帝國の最南端に位し、澎湖列島及其他の附屬島嶼より成る。今之を
 緯度で釋ぬるに、東經百九度十八分より百二十二度六分、北緯二十一度四十五分より
 二十度三十分に至る。北緯海上六百二十四哩にして九州の南端鹿兒島に達し、西は萊
 州海峡を隔て、近く支那大陸に相接し、東は太平洋を隔て、遠く米大陸に相對し、南はバ
 ンダ海峽を隔て、近く北緯羣島に相隣す。

經度及緯度

島嶼名	緯度(北緯)	經度(東經)	極端	位置
澎湖島	同	同	極北	白沙庄自斗嶼北端
臺灣本島	極北	極東	極北	望安庄大嶼南端
	極南	極西	極南	望安庄花嶼西端
	極東	極東	極東	澎湖廳湖西庄查母嶼東端
	極西	極西	極西	澎湖廳湖西庄查母嶼西端
澎湖列島及其他	極北	極東	極北	高稚州恒春郡七星岩南端
	極南	極西	極南	高稚州恒春郡七星岩南端
	極東	極東	極東	臺北州基隆市彭佳嶼北端
	極西	極西	極西	臺北州基隆市彭佳嶼北端

二面積

臺灣の面積は三萬五千九百方呎にして、帝國の總面積六十七萬四千方呎中その五分三厘を占め、九州よりは稍や小さく、樺太と伯仲し、朝鮮に比すれば約その六分の一に當る。尙之を列國の面積に比すれば、瑞西(四萬一千二百九十五方呎)とサルバドル(三萬四千二百二十六方呎)との中間に位す。

總數	帝國面積	面積	百分比例
臺灣	三萬五千九百	三, 590	5.3
朝鮮	三十七萬	370, 000	55.7
樺太	八萬	80, 000	12.1
北海道	八萬	80, 000	12.1
内地府縣	五十三萬	530, 000	78.8
總計	一四三萬	1, 430, 000	100.0

本表の外租借地として關東州(州内、鐵道附屬地)の面積三千七百三十九方呎(二百四十二方里)及南洋委任統治區域の面積二千四百四十九方呎(百三十九方里)あり。本表は帝國統計年鑑に依る。

三山嶽

臺灣は帝國第一の高山、新高山を始めとし、海拔一萬尺以上のもの四十八座、九千尺級のもの十七座、八千尺級のもの二十四座、七千尺級のもの二十六座を有す。故に七千尺以上の高山の總数は百十五座の多きに達し、所謂「高山國」の名に背かずして熱帯、暖帯、温帯、寒帯等各種の林相を有す。

帝國の全領土を通じて一萬尺以上の高山は總數六十一座を算し、就中臺灣は四十八座を占め、内地は僅かに十三座を有し、北海道、朝鮮、樺太は共に之を缺く。即ち新高山は一萬三千三十五尺を以て第一位を占め、富士山は漸く第六位に在り、内地第二の高山北嶽は僅かに四十一位を占むるに過ぎず。

山名	海面よりの高さ	順位
新高山	三九〇〇	一
次高山	三九〇〇	二
秀姑巒山	三九〇〇	三
マボラス山	三九〇〇	四
南湖大山	三九〇〇	五
富士山(内地)	三九〇〇	六
中央尖山	三九〇〇	七
關山	三九〇〇	八

大水窟山	三六〇〇	九
寄菜主山	三六〇〇	一〇
東郡大山	三六〇〇	一一
大郡山	三六〇〇	一二
大郡山	三六〇〇	一三
大郡山	三六〇〇	一四
大郡山	三六〇〇	一五
大郡山	三六〇〇	一六
大郡山	三六〇〇	一七
大郡山	三六〇〇	一八
大郡山	三六〇〇	一九
大郡山	三六〇〇	二〇
大郡山	三六〇〇	二一
大郡山	三六〇〇	二二
大郡山	三六〇〇	二三
大郡山	三六〇〇	二四
大郡山	三六〇〇	二五
大郡山	三六〇〇	二六
大郡山	三六〇〇	二七
大郡山	三六〇〇	二八
大郡山	三六〇〇	二九
大郡山	三六〇〇	三〇
大郡山	三六〇〇	三一
大郡山	三六〇〇	三二
大郡山	三六〇〇	三三
大郡山	三六〇〇	三四
大郡山	三六〇〇	三五
大郡山	三六〇〇	三六
大郡山	三六〇〇	三七
大郡山	三六〇〇	三八
大郡山	三六〇〇	三九
大郡山	三六〇〇	四〇
大郡山	三六〇〇	四一
大郡山	三六〇〇	四二
大郡山	三六〇〇	四三
大郡山	三六〇〇	四四
大郡山	三六〇〇	四五
大郡山	三六〇〇	四六
大郡山	三六〇〇	四七
大郡山	三六〇〇	四八
大郡山	三六〇〇	四九
大郡山	三六〇〇	五〇
大郡山	三六〇〇	五一
大郡山	三六〇〇	五二
大郡山	三六〇〇	五三
大郡山	三六〇〇	五四
大郡山	三六〇〇	五五
大郡山	三六〇〇	五六
大郡山	三六〇〇	五七
大郡山	三六〇〇	五八
大郡山	三六〇〇	五九
大郡山	三六〇〇	六〇
大郡山	三六〇〇	六一
大郡山	三六〇〇	六二
大郡山	三六〇〇	六三
大郡山	三六〇〇	六四
大郡山	三六〇〇	六五
大郡山	三六〇〇	六六
大郡山	三六〇〇	六七
大郡山	三六〇〇	六八
大郡山	三六〇〇	六九
大郡山	三六〇〇	七〇
大郡山	三六〇〇	七一
大郡山	三六〇〇	七二
大郡山	三六〇〇	七三
大郡山	三六〇〇	七四
大郡山	三六〇〇	七五
大郡山	三六〇〇	七六
大郡山	三六〇〇	七七
大郡山	三六〇〇	七八
大郡山	三六〇〇	七九
大郡山	三六〇〇	八〇
大郡山	三六〇〇	八一
大郡山	三六〇〇	八二
大郡山	三六〇〇	八三
大郡山	三六〇〇	八四
大郡山	三六〇〇	八五
大郡山	三六〇〇	八六
大郡山	三六〇〇	八七
大郡山	三六〇〇	八八
大郡山	三六〇〇	八九
大郡山	三六〇〇	九〇
大郡山	三六〇〇	九一
大郡山	三六〇〇	九二
大郡山	三六〇〇	九三
大郡山	三六〇〇	九四
大郡山	三六〇〇	九五
大郡山	三六〇〇	九六
大郡山	三六〇〇	九七
大郡山	三六〇〇	九八
大郡山	三六〇〇	九九
大郡山	三六〇〇	一〇〇

南	能	卑	干	カ	郡	タ	小	能	屏	大	尖	北	間	餘	繪	マ
變	高	卓	卓	シ	大	大	關	高	武	武	バ	北	ヶ	ヶ	ケ	ビ
頭	山	萬	萬	バ	大	大	大	高	武	武	ト	北	ヶ	ヶ	ケ	ビ
山	南	山	山	ナ	山	山	山	山	山	山	ノ	山	山	山	山	山
峰	峰	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
11,000	10,500	10,200	10,200	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
六	元	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三

白	ウ	赤	奥	東	東	西	安	御	關	大	白	小	仙	南
石	ツ	石	關	俣	高	東	東	嶽	嶽	石	根	雪	丈	嶽
山	ツ	山	嶽	山	嶽	郡	郡	山	山	公	山	山	山	山
山	ノ	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
六	六	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三

内地の分は第四十七回國勢一表に依る。

四河川

寒灘は幅員狭く、その最も廣き部分と雖も、僅かに四十里内外に過ぎず、且つ高蜂南北に貫通するを以て、河川の發源孰れも近く、舟楫の便は多く阻むべからず。流域二十里以上のもの僅かに十を算し、最長の河川たる濁水溪にして漸く四十二里に過ぎず。

濁水溪	四十二里
下淡水溪	三十七里
曾水文溪	三十七里
淡水河	三十一里
大甲溪	二十七里
島甲溪	二五里
八獎溪	二二里
秀姑巒溪	二二里
卑南溪	二二里
大安溪	二二里

本表は流域二十里以上のもののみを掲ぐ。

五 土地の利用

臺灣の總面積は三百六十二萬七千町歩(三百七十萬九千甲)にして、内耕地八十一萬町歩(八十三萬甲)、林野二百五十三萬町歩(二百五十九萬甲)、其他二十八萬町歩(二十九萬甲)なり。

今之を内地其他と比較するに、總面積に對する耕地の割合最も大なるは、關東州の五割五分にして、臺灣は二割二分を以て之に距き、樺太の七厘最も小なり。林野に於ては樺太の八割一分最も大にして、朝鮮の七割三分、北海道、臺灣の七割之に距き、關東州の二割五分最も小なり。耕地及林野以外の土地の割合最も大なるは内地府縣の二割七分にして朝鮮の七分最も小なり。

	實數			百分比例		
	耕地	林野	其他	耕地	林野	其他
臺灣	810,000	2530,000	280,000	31	71	7
朝鮮	450,000	2,900,000	1,300,000	17	73	10
關東州	360,000	2,900,000	270,000	13	73	14
樺太	20,000	2,900,000	280,000	1	71	28
北海道	360,000	2,900,000	270,000	13	73	14
内地府縣	360,000	2,900,000	270,000	13	73	14
耕地は昭和四年末現在なり。						

林野の臺灣、朝鮮、樺太及關東州(州内、鐵道附屬地)は昭和四年末現在、北海道及内地府縣は同三年末現在なり。
 朝鮮、樺太、關東州は拓務省統計概要に依る。
 北海道、内地府縣は農林省統計表に依る。

六氣 温

蒸湖は北回線に跨り、半は熱帯圏に位置するが故に、内地に比すれば夏季長く、冬季短きも、その最高気温は敢て内地より高しと謂ふにあらず。而も冬季は頗る暖かにして、高山を除いては降雪を見ず、北部の平地に於ては偶々霜を見る事なしとせざるも極て稀なり。今内地其の他と比較するに、累年平均気温は我蒸湖最も高きも、最高極数の気温に至りては内地其の他の地域に却つて高き處あるを見る事少なからず。即ち蒸中の三十九度三分(華氏百二度七分)は新潟の三十九度一分(華氏百二度四分)よりは二分高く、又蒸南の三十六度九分(華氏九十八度四分)は京城の三十七度五分(華氏九十九度五分)よりは六分低く、蒸北の三十八度六分(華氏百一度五分)は大坂の三十七度六分(華氏九十九度七分)より一度高し。更に恒春の三十五度(華氏九十五度)釜山、旭川と同じ)及蒸湖の三十三度九分(華氏九十三度)(函館と同じ)は大泊、函館を除けば他の何れの地方よりも低し。

蒸湖	昭和四年		平均	最高の極	年	最低の極	年
	氏	氏					
恒春	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
蒸東	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
蒸南	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三

長崎	那珂	内地府縣	旭川	札幌	函館	北海道	關東	大泊	樺太	京城	釜山	朝鮮	蒸北	蒸中	蒸南
一五	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六
五九	七九	七九	七九	七九	七九	七九	七九	七九	七九	七九	七九	七九	七九	七九	七九
一五	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六
六九	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八
一五	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六
六九	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八
一五	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六
六九	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八

大	一五五	一五七	一五三	一五三	一五七	一五八	一五七	一五三	一五三	一五三	一五三
阪	一五五	一五七	一五三	一五三	一五七	一五八	一五七	一五三	一五三	一五三	一五三
東	一五五	一五七	一五三	一五三	一五七	一五八	一五七	一五三	一五三	一五三	一五三
新	一五五	一五七	一五三	一五三	一五七	一五八	一五七	一五三	一五三	一五三	一五三
青	一五五	一五七	一五三	一五三	一五七	一五八	一五七	一五三	一五三	一五三	一五三

(-)は零點下を示す

七 雨 量

臺灣は南北に依り其の降雨期を異にす。即ち北部は十月より翌年三月迄の冬季六箇月、南部は五月より九月に至る夏季五箇月を雨期とす。北部は基隆附近最も降雨量多く、基隆に近き暖地は一年四千三百餘毫米を算し、且つ世界有数の降雨地として知らる。南部に於ては潮州郡濬地クワルスの四千五百餘毫米最多量を示し、降雨量の最も少きは澎湖島にして一年の總量九百餘毫米なり。

更に之を内地其他と比較するに、臺灣は全島を通じて一般に他の地方よりも降雨量多きもの如し。

恒	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三
濬	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三
地	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三
阿	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三
湖	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三
山	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三
中	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三
北	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三

昭和四年 總量

累年平均 總量

昭和四年 最多日数

青新

森渴

1395
1400

1410
1400

1425
1430

1445
1450

内旭北關樺湖
東大長那 旭札爾 北旅 大 城京釜 駿基
地 府 海 東

京阪崎湖縣川橋館道順州泊太津城山鮮暖陸

1465 1470 1475 1480 1485 1490 1495

1500 1505 1510 1515 1520 1525 1530

1535 1540 1545 1550 1555 1560 1565

1570 1575 1580 1585 1590 1595 1600

八 人口

臺灣の總人口は昭和四年末現在四百五十餘萬人にして内、内地人二十二萬人、本島人四百二十萬人(平地居住の蕃人を含む)、蕃人八萬六千人(蕃地居住者のみ)、外國人四萬人なり。昭和四年末現在帝國の總人口は八千七百萬人を算し、臺灣は四百五十萬人(蕃地居住の蕃人を含む)にして實に其の五分を占む。更に臺灣の人口を列國のそれに比すれば略々智利と勃蘭牙利との中間に位す。

一 種族別人口 (昭和四年末現在)

種族	總數		百分比
	男	女	
内地人	22,000	33,800	100.0
本島人	3,000	10,100	10.9
蕃人	86,000	20,000	9.5
外國人	4,200	4,800	1.9
總計	114,200	68,700	100.0

本島人中には平地の蕃社に居住する蕃人五萬四千五百人を含算せり。故に本表の蕃人には蕃地の蕃社に居住する者のみを掲せり。

二 内地其の他との人口比較 (昭和四年末現在)

種族	實數	百分比	一方里に付	
			一方里に付	一方里に付
内地府縣	20,311,000	95.3	3,200	2,711
北海道	1,217,000	5.9	70	103
樺太	1,217,000	5.9	70	103
朝鮮	1,217,000	5.9	70	103
臺灣	450,000	2.1	2,700	1,900
總計	21,472,000	100.0	3,270	2,814

本表の外租借地としての關東州(州内、鐵道附屬地)は人口百二十一萬五千七百八十八人を有し、一方里に付三百二十八人(一方里に付五千六十五人)及南洋委任統治區域は人口六萬六千七百二十一人を有し、一方里に付人口三十一人(一方里に付四百八十人)を算す。

括弧内の數字は平地面積に對する平地人口の割合を示す。
 朝鮮、樺太、關東州及南洋委任統治區域は拓務省統計概要に依る。
 南洋委任統治區域は昭和五年四月一日現在なり。
 北海道、内地府縣は昭和四年十月一日現在にして帝國統計年鑑に依る。

九 本籍別内地人

臺灣在住内地人の總數は昭和四年末現在(警務局調査)に於て二十一萬五千七百六十六人にして内、鹿児島縣の二萬五千四百八十五人第一位を占め、熊本縣は二萬二千三百三十七人にて之に次ぎ、福岡縣は遙かに下りて一萬二千八百四十二人を以て第三位に在り、廣島、山口の二縣順次に次ぎ、其の最も少きは青森縣の四百六十一人なり。

縣	總數	百分比	順位
鹿児島	二五、四八五	一一九・〇	一
熊本	二二、三三七	一〇二・〇	二
福岡	一三、八四三	六二・〇	三
廣島	九、八〇九	四六・〇	四
山口	九、四〇三	四四・〇	五
佐賀	九、〇九三	四二・〇	六
長崎	八、八三一	四一・〇	七
東京	七、〇三七	三二・〇	八
神戶	七、〇〇七	三二・〇	九
大阪	六、八八三	三二・〇	一〇
京都	六、八〇三	三一・〇	一一
新潟	五、九〇三	二七・〇	一二

大宮 兵 愛 岡 愛 高 福 岐 茨 靜 石 島 香 長 德 京 和
 崎 阪 庫 綴 山 知 知 島 阜 城 岡 川 根 川 野 島 都 山 藥

四九、六〇〇	二二・〇	三
四九、〇〇〇	二一・〇	四
四七、三三三	二〇・〇	五
四四、八〇〇	一九・〇	六
四三、〇〇〇	一八・〇	七
四一、〇〇〇	一七・〇	八
三九、〇〇〇	一六・〇	九
三八、〇〇〇	一五・〇	一〇
三六、〇〇〇	一四・〇	一一
三五、〇〇〇	一三・〇	一二
三三、〇〇〇	一二・〇	一三
三二、〇〇〇	一一・〇	一四
三一、〇〇〇	一〇・〇	一五
三〇、〇〇〇	九・〇	一六
二九、〇〇〇	八・〇	一七
二八、〇〇〇	七・〇	一八
二七、〇〇〇	六・〇	一九
二六、〇〇〇	五・〇	二〇
二五、〇〇〇	四・〇	二一
二四、〇〇〇	三・〇	二二
二三、〇〇〇	二・〇	二三
二二、〇〇〇	一・〇	二四
二一、〇〇〇	〇・〇	二五

木表の外権太人二十七人あり。
 三島 瀬戸 川賀 形賀 山賀 馬山 梨道 木山 玉手 山手 森
 三島 瀬戸 川賀 形賀 山賀 馬山 梨道 木山 玉手 山手 森

三島 瀬戸 川賀 形賀 山賀 馬山 梨道 木山 玉手 山手 森

三島 瀬戸 川賀 形賀 山賀 馬山 梨道 木山 玉手 山手 森

三島 瀬戸 川賀 形賀 山賀 馬山 梨道 木山 玉手 山手 森

一〇 在外臺灣人

在外臺灣人の總數は、大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れば、四千七百八十五人にしてその大部分は中華民國に在留す。即ち中華民國在留臺灣人の總數は四千二百三十六人にして内、三千八十五人は對臺廈門に居住し、福州は七百六十六人、汕頭は二百三十六人を算す。

中華民國以外の地方に在りては、爪哇の二百十八人第一位を占め、海峽植民地の百五人に次ぐ。

總數	男	女
四七五	三〇五	一七〇
關東	一〇	一
青島	一	一
廈門	三〇	一五
福州	七六六	三九二
汕頭	二六	一三
廣東	一六	八
其他	一〇	五
爪哇	一八	九

海峽植民地	新嘉坡	暹羅	香港	暹羅	比羅	漢羅	智羅
一五	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
總數	男	女	總數	男	女	總數	男
一〇	五	五	一〇	五	五	一〇	五
一〇	五	五	一〇	五	五	一〇	五

一一 在留外國人

在留外國人の總數は大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れば、二萬三千六百六十四人なり、今之が國籍を轉ぬるに、中華民國人はその大部分を占め二萬三千四百六十七人を算し、英吉利人の八十九人、北米合衆國人の四十二人順次に並ぶ。

總數	三三六四
中華民國	三三〇七
英吉利	八十九
北米合衆國	四十二
西班牙	一
智利	一
印度	一
ペネジュラ	一
比律賓	一
獨逸	一
露西	一
瑞西	一
佛蘭	一

葡丁	一
荷蘭	一
希臘	一
加爾	一
亞爾	一
伯爾	一
波爾	一
澳洲	一
刺西	一
牙抹	一

本表の外、外國に國籍を有せざる者七百九十九人、國籍不詳の者三人あり。本表には調査當日基隆港泊の外國船乗組員をも含むを以て國籍數比較的多し。

一一 臺灣語を話す内地人

内地人にして臺灣語を話すもの数は、明治三十八年の六千八百二十九人より、大正四年の一萬六千五百九十一人に増加し、更に大正九年には一萬七千二百七十三人に増加したるも、その内地人千に對する割合は、大正四年の百四十二人五分より、大正九年の百五人二分に減退したり。

年	總數		男女別内地人千に付	
	男	女	男	女
明治三十八年	六八〇	六〇〇	二九二	二八八
大正四年	一六六一	一四四	三三五	一六九
同 九年	一七三三	一四九六	三三三	一六六

平均 男 女

本表は第一回及第二回戸口調査並に第一回國勢調査の結果にして何れも十月一日現在なり。

一二 國語を解する本島人

本島人にして國語を解するもの数は、明治三十八年の一萬一千二百七十人より、大正四年の五萬四千三百三十七人に増加し、更に大正九年には九萬九千六百五十五人に増加したるも、尙本島人千に對し僅かに二十八人六分を算するに過ぎず。

年	總數		男女別本島人千に付	
	男	女	男	女
明治三十八年	一三〇	一〇二	三八	二二
大正四年	一五三	一三〇	三八	二二
同 九年	一五三	一三〇	三八	二二

平均 男 女

本表は第一回及第二回戸口調査並に第一回國勢調査の結果にして何れも十月一日現在なり。

一四 婚姻、離婚、出生及死亡

臺灣に於ける最近十八年間の婚姻、離婚、出生及死亡を觀るに、人口千に付婚姻は大正元年の十一件三分より昭和四年の十件五分に減少し、離婚は同じく一件五分より昭和四年の一件に減少し、出生は大體に於て増加の傾向を有し、大正元年の四十一人九分より昭和四年の四十四人四分に増加せり。死亡は年に依り相違ありと雖も漸減の狀勢にあり、大正七年の如きは三十四人八分の多きに達したるも、昭和四年には二十一・七分に減退したり。従つて出生の死亡超過數は年により懸隔あり、大正七年の如き僅かに二萬人に過ぎざりしが、昭和四年には十萬一千人の多きに達したり。

年	婚姻	離婚	出生(生童)	死亡	自然増減 (出生超過)
大正元年	四,一三〇	四〇三	一四〇,四九八	八〇,四三三	五九,〇六五
同二年	三,七二七	四〇三	一四一,七九七	八〇,二二〇	六一,五七七
同三年	三,九七七	四〇三	一四二,一〇九	七九,七二一	六二,三八八
同四年	三,六六六	四〇三	一四三,〇三三	七九,三三三	六三,七〇〇
同五年	三,六六六	四〇三	一四三,七二七	七九,〇九二	六四,六三五
同六年	三,〇三三	四〇三	一四八,〇三三	七九,九七九	六八,〇五四
同七年	三,〇三三	四〇三	一四八,〇三三	七九,九七九	六八,〇五四
同八年	三,〇三三	四〇三	一四八,〇三三	七九,九七九	六八,〇五四

年	婚姻	離婚	出生(生童)	死亡	自然増減 (出生超過)
同九年	三,〇三三	四〇三	一四八,〇三三	七九,九七九	六八,〇五四
同十年	三,〇三三	四〇三	一四八,〇三三	七九,九七九	六八,〇五四
同十一年	三,〇三三	四〇三	一四八,〇三三	七九,九七九	六八,〇五四
同十二年	三,〇三三	四〇三	一四八,〇三三	七九,九七九	六八,〇五四
同十三年	三,〇三三	四〇三	一四八,〇三三	七九,九七九	六八,〇五四
同十四年	三,〇三三	四〇三	一四八,〇三三	七九,九七九	六八,〇五四
昭和元年	三,〇三三	四〇三	一四八,〇三三	七九,九七九	六八,〇五四
同二年	三,〇三三	四〇三	一四八,〇三三	七九,九七九	六八,〇五四
同三年	三,〇三三	四〇三	一四八,〇三三	七九,九七九	六八,〇五四
同四年	三,〇三三	四〇三	一四八,〇三三	七九,九七九	六八,〇五四

一五 出生率

臺灣の出生率は之を最近十八年間に就て觀るに、年に依りて増減ありと雖も、概して増加之趨勢にあり、昭和四年は人口千に付四十四人四分を示せり。更に之を内地其他と比較するに、臺灣は其の割合最も高く、北海道之に次ぎ、關東州最も低し。又列國中出生率の最も高きは智利の四十四人八分(昭和四年)なるが故に、我臺灣の出生率は世界に於て最も高き部類に屬す。

一 出生率 (人口千に付)

年	平均	内地人	本島人	外國人
大正元年	42.9	48.8	45.5	28.8
二年	42.1	47.7	45.0	28.5
三年	41.1	46.8	44.0	28.0
四年	40.9	45.7	43.8	27.8
五年	40.1	44.7	42.8	27.3
六年	39.6	43.6	41.8	26.9
七年	38.5	42.5	40.8	26.6
八年	37.5	41.4	39.8	26.3
九年	36.5	40.3	38.8	26.0
十年	35.5	39.2	37.8	25.7
十一年	34.5	38.1	36.8	25.4
十三年	33.5	37.0	35.8	25.1
十四年	32.5	35.9	34.8	24.8
十五年	31.5	34.8	33.8	24.5
十六年	30.5	33.7	32.8	24.2
十七年	29.5	32.6	31.8	23.9
十八年	28.5	31.5	30.8	23.6

二 内地其他との出生率累年比較 (人口千に付)

年	臺灣	朝鮮	樺太	關東州	北海道	内地府縣
大正元年	42.9	46.9	35.0	45.6	45.5	33.9
二年	42.1	46.7	35.0	45.3	45.5	33.7
三年	40.9	46.3	34.9	45.0	45.5	33.5
四年	40.1	45.9	34.8	44.7	45.5	33.3
五年	39.6	45.5	34.7	44.4	45.5	33.1
六年	38.5	45.1	34.6	44.1	45.5	32.9
七年	37.5	44.7	34.5	43.8	45.5	32.7
八年	36.5	44.3	34.4	43.5	45.5	32.5
九年	35.5	43.9	34.3	43.2	45.5	32.3
十年	34.5	43.5	34.2	42.9	45.5	32.1
十一年	33.5	43.1	34.1	42.6	45.5	31.9
十三年	32.5	42.7	34.0	42.3	45.5	31.7
十四年	31.5	42.3	33.9	42.0	45.5	31.5
十五年	30.5	41.9	33.8	41.7	45.5	31.3
十六年	29.5	41.5	33.7	41.4	45.5	31.1
十七年	28.5	41.1	33.6	41.1	45.5	30.9
十八年	27.5	40.7	33.5	40.8	45.5	30.7

同八年	同九年	同十年	同十一年	同十二年	同十三年	同十四年	昭和元年	同二年	同三年	同四年	朝鮮、樺太、關東州(州内、鐵道附屬地、領事館)は同應統計書に依る。	北海道、内地(附屬地)は帝國統計年鑑に依る。
5.3	5.2	5.3	5.7	5.8	5.6	5.2	5.1	5.6	5.2	5.8		
6.8	6.6	6.7	6.8	6.5	6.3	6.0	5.9	5.5	5.2	5.8		
6.4	6.2	6.3	6.4	6.3	6.3	6.0	5.9	5.8	5.9	5.3		
6.6	6.5	6.4	6.4	6.4	6.5	6.7	6.9	6.5	6.9	6.3		
6.0	5.5	5.5	5.4	5.4	5.4	5.5	5.5	5.9	5.6	5.3		
5.8	5.7	5.9	5.9	5.9	5.8	5.8	5.8	5.8	5.8	5.8		

一六 死亡率

臺灣の死亡率は最近十八年間に就て觀るに、是れ亦高低常ならずを雖も、大正十二年には著しく低下し、人口千に付二十一・八六分を以て最低の記録を示せり。内地人の死亡率は之を本島人に比すれば甚だ低く、昭和四年には本島人二十二・二分なるに對し、内地人は僅かに十二・二分を示せり。

更に之を内地其他と比較するに、死亡率の最も低きは關東州にして、北海道之に次ぎ、最近我臺灣は減少の趨勢にあり、昭和四年には朝鮮の二十三・九分最も高し。(列國中死亡率の最も高きは、智利にして昭和元年には二十七・三分を示せり)。

一 死亡率 (人口千に付)

大正	同二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年	同八年	平均	内地人	本島人	外國人
21.86	22.2	22.4	22.5	22.6	22.7	22.8	22.9	23.0	23.1	23.2	23.3
12.2	12.3	12.4	12.5	12.6	12.7	12.8	12.9	13.0	13.1	13.2	13.3
22.8	22.9	23.0	23.1	23.2	23.3	23.4	23.5	23.6	23.7	23.8	23.9
23.9	24.0	24.1	24.2	24.3	24.4	24.5	24.6	24.7	24.8	24.9	25.0

同六年	同七年	同八年	同九年	同十年	同十一年	同十二年	同十三年	同十四年	同十五年	同十六年	同十七年	同十八年	同十九年	同二十年	同二十一年	同二十二年	同二十三年	同二十四年	同二十五年	同二十六年	同二十七年	同二十八年	同二十九年	同三十年
三〇五	三〇七	三〇九	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇
三〇五	三〇七	三〇九	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇

朝鮮、樺太、關東州(州内、鐵道附屬地、領事館)は同統計書に依る。
 北海道、内地府縣は帝國統計年鑑に依る。

同五年	同六年	同七年	同八年	同九年	同十年	同十一年	同十二年	同十三年	同十四年	同十五年	同十六年	同十七年	同十八年	同十九年	同二十年	同二十一年	同二十二年	同二十三年	同二十四年	同二十五年	同二十六年	同二十七年	同二十八年	同二十九年	同三十年
三〇五	三〇七	三〇九	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇
三〇五	三〇七	三〇九	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇	三一〇

二 内地其他との死亡率累年比較 (人口千に付)

大正元年 三〇五
 二年 三〇七
 三年 三〇九
 四年 三一〇
 五年 三一〇
 六年 三一〇
 七年 三一〇
 八年 三一〇
 九年 三一〇
 十年 三一〇
 十一年 三一〇
 十二年 三一〇
 十三年 三一〇
 十四年 三一〇
 十五年 三一〇
 十六年 三一〇
 十七年 三一〇
 十八年 三一〇
 十九年 三一〇
 二十年 三一〇
 二十一年 三一〇
 二十二年 三一〇
 二十三年 三一〇
 二十四年 三一〇
 二十五年 三一〇
 二十六年 三一〇
 二十七年 三一〇
 二十八年 三一〇
 二十九年 三一〇
 三十年 三一〇

和 三〇五
 十 三〇七
 十一 三〇九
 十二 三一〇
 十三 三一〇
 十四 三一〇
 十五 三一〇
 十六 三一〇
 十七 三一〇
 十八 三一〇
 十九 三一〇
 二十 三一〇
 二十一 三一〇
 二十二 三一〇
 二十三 三一〇
 二十四 三一〇
 二十五 三一〇
 二十六 三一〇
 二十七 三一〇
 二十八 三一〇
 二十九 三一〇
 三十 三一〇

關東州 三〇五
 樺太 三〇七
 朝鮮 三〇九
 北海道 三一〇
 内地府縣 三一〇

一七 人口の増加

臺灣の人口は、明治三十八年十月一日施行の第一回戸口調査の結果に依れば、三百萬なりしも、大正元年末には三百三十五萬に増加し、更に昭和四年末には四百四十六萬に達し、過去十八年間に三割三分の増加を示せり。更に人口増加の趨勢を内地其他と比較するに、増加の割合最も大なるは樺太にして、關東州之に並ぎ、北海道、朝鮮、臺灣、内地の順序を以て之に次ぐ。

一 最近十八箇年間の人口 (各年末現在)

大正元年	二年	三年	四年	五年	六年	七年	八年	九年
總數	3,559,922	3,748,770	3,846,779	3,933,779	4,011,110	4,080,000	4,147,779	4,215,000
男	1,750,000	1,840,000	1,880,000	1,920,000	1,960,000	2,000,000	2,040,000	2,080,000
女	1,809,922	1,908,770	1,966,779	2,013,779	2,051,110	2,080,000	2,107,779	2,135,000
指數	100	101	102	103	104	105	106	107

二 内地其他との累年人口指數比較 (各年末現在)

大正元年	二年	三年	四年	五年
臺灣	100	101	102	103
朝鮮	100	104	108	112
樺太	100	104	108	112
關東州	100	104	108	112
北海道	100	104	108	112
内地府縣	100	101	102	103

本表には藩地の蕃民に居住する蕃人を除き、平地の蕃民に居住する蕃人は之を算入せり。

昭和元年	二年	三年	四年	五年	六年	七年	八年	九年	十年	十一年	十二年	十三年	十四年	十五年
臺灣	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113
朝鮮	100	104	108	112	116	120	124	128	132	136	140	144	148	152
樺太	100	104	108	112	116	120	124	128	132	136	140	144	148	152
關東州	100	104	108	112	116	120	124	128	132	136	140	144	148	152
北海道	100	104	108	112	116	120	124	128	132	136	140	144	148	152
内地府縣	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113

同六年	三〇	二〇	一六	三	三〇
同七年	三〇	二〇	一六	三	三〇
同八年	三〇	二〇	一六	三	三〇
同九年	三〇	二〇	一六	三	三〇
同十年	三〇	二〇	一六	三	三〇
同十一年	三〇	二〇	一六	三	三〇
同十二年	三〇	二〇	一六	三	三〇
同十三年	三〇	二〇	一六	三	三〇
同十四年	三〇	二〇	一六	三	三〇
昭和元年	三〇	二〇	一六	三	三〇
同二年	三〇	二〇	一六	三	三〇
同三年	三〇	二〇	一六	三	三〇
同四年	三〇	二〇	一六	三	三〇

朝鮮、樺太、關東州(州内)、鐵道附屬地、領事館(は同縣統計書に依る。
北海道、内地府縣は帝國統計年鑑に依る。
(内地府縣及北海道の大正九年以後は十月一日現在なり)。

一八 蕃 人

臺灣の蕃人は之をタイヤル、サイセツト、ブヌン、ツオウ、バイワン、アミ及ヤミの七種族に分つ。昭和四年末現在蕃社数は七百二十、戸數二萬三千五百七十六、人口十四萬人なるも、中五萬四千人は平地の蕃社に居住するが故に、實際蕃地に居住するもの數は八萬六千人なり。

各種族中人口最も多きはアミ族にして總人口の三割を占め、バイワン族の二割九分、タイヤル族の二割四分等に亘く。

總數	一四、一六三	總數	一四、一六三	男	七、〇七三	女	七、〇九〇	百分比	一〇〇				
タイヤル	三、七〇〇	サイセツト	一、一六三	ブヌン	一、七〇三	ツオウ	九二九	バイワン	一、三三三	アミ	三、三三三	ヤミ	一、六二九

本表中平地の蕃社に居住する蕃人五萬四千五十人は本島人として人口統計に計上せらる。

一九 行政區劃

臺灣の地方行政區劃は、幾多の變遷を経たる後、大正九年九月一日に至り、地方官制に根本的改革を加へ、従來の十二廳を五州二廳に改めたりしが、大正十五年七月一日更に澎湖廳を設け、三廳となし現に五州は之を七市四十五郡に分ち、郡の下には三十一街、二百二十庄を置き、三廳は之を十支廳に分ち、支廳の下には三街五庄十九區を置く。

澎湖廳	臺北廳	新竹州	桃園州	臺南州	高雄州	花蓮廳	澎湖廳
支廳	支廳	支廳	支廳	支廳	支廳	支廳	支廳
市	市	市	市	市	市	市	市
街	街	街	街	街	街	街	街
庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄
區	區	區	區	區	區	區	區

本表は昭和五年末現在なり。

二〇 州及廳の面積

五州三廳中、面積の最大なるは濠州の四百七十九方里にして、高雄、濠南、花蓮港、新竹、濠北、濠東の順序を以て之に連ぎ、澎湖廳は僅かに八方里餘を以て最小の地位を占む。

今之を内地府縣に比較すれば、濠中州は熊本、宮城の中間に、高雄州は山口、三重の中間に、濠南州は和歌山、千葉の中間に、花蓮港廳は愛媛、京都の中間に、新竹州及濠北州は京都、山梨の中間に、濠東廳は奈良、鳥取の中間に位し、澎湖廳は面積狭小にして比較すべき府縣なし。

一 州及廳の面積

全	面積		百分比例
	方里	方里	
濠州	479	100	100.0
新竹州	457	95.4	95.4
濠南州	466	97.3	97.3
濠東廳	354	73.9	73.9
高雄州	335	70.1	70.1
花蓮港廳	7	1.5	1.5
澎湖廳	8	1.7	1.7

二 州及廳の人口

五州三廳中人口の最も多きは濠南州の百十四萬人にして、濠中州は九十八萬人を以て之に次ぎ、以下濠北、新竹、高雄、花蓮港、澎湖、濠東の順序を以てし、一方里の人口は澎湖廳の七千六百八十八人最も高く、濠東廳の七百十八人最も低し。

次に昭和五年十月一日に於ける濠南現住人口を内地府縣に比較すれば、濠南州は岐阜、三重の中間に、濠中州は山形、秋田の中間に、濠北州は大分、青森の中間に、新竹及高雄の兩州は滋賀、山梨の中間に位し、花蓮港、濠東及澎湖の三廳は人口稀少にして比較すべき府縣なし。

一 州及廳の人口 (昭和四年末現在)

州	實數	百分比例	平方里に付人口
全	1,433,333	100.0	3,586
濠南州	1,140,000	79.5	3,330
濠中州	980,000	68.4	3,060
濠北州	600,000	41.9	2,155
新竹州	400,000	27.9	2,090
高雄州	250,000	17.4	1,343
花蓮港	150,000	10.4	867
澎湖廳	76,888	5.3	449

二 内地府縣との人口比較

(昭和五年十月一日現在)

府縣	人口	平方里に付人口
濠東廳	60,000	72
花蓮港廳	69,500	90
澎湖廳	76,888	95
澎湖廳	76,888	95
岐阜縣	1,140,000	3,330
三重縣	1,000,000	2,970
山形縣	1,000,000	2,970
秋田縣	1,000,000	2,970
大分縣	1,000,000	2,970
青森縣	1,000,000	2,970
新瀨波縣	1,000,000	2,970
岐阜縣	1,140,000	3,330
三重縣	1,000,000	2,970
山形縣	1,000,000	2,970
秋田縣	1,000,000	2,970
大分縣	1,000,000	2,970
青森縣	1,000,000	2,970
新瀨波縣	1,000,000	2,970

本表には濠地の府縣に居住する濠人を含まず、但し一方里に付人口の全面積には濠地居住の濠人も加へて算出せり。

高 山 花 澎 燕
雄 梨 港 湖 東
州 縣 廳 廳 廳

三三三
二二二
一一一

二二二 主要都市

臺灣には昭和四年末に於て五市、三十六街あり。内、人口二萬以上の市及街は二十六に於て、その第一位を占むるは臺北市の二十二萬九千、之に次ぐは臺南市の九萬五千、基隆市の七萬五千、高雄市の五萬七千、嘉義街の五萬五千、臺中市の五萬二千、新竹街の四萬四千等なり。而して東部に於ける總所在地たる臺東、花蓮港の兩街は僅かに一萬を有するのみなり。次に島内に於ける五市及主なる三街を内地其他の都市に比較するに、昭和五年十月一日現在に依れば、我が臺北市は、大阪、東京、名古屋、神戸、京都、横濱、京城、廣島の八市に就て實に第九位を占め、福岡市の上に位し、臺南市は濱松、徳島兩市の中間に、基隆市は富山、長野兩市の中間に、高雄市は山形、盛岡兩市の中間に、臺中市は宮崎、八戸兩市の中間に、新竹街は福島、米澤兩市の中間に位す。而して臺東、花蓮港の兩街は共にその人口樺太の首都樺原よりも少し。

一 主要都市の人口 (昭和四年末現在)

總數	内地人	本島人	外國人	順位
臺北市(臺北州)	三三,三〇〇	三三,三〇〇	〇	一
臺南市(臺南州)	九,五〇〇	九,五〇〇	〇	二
基隆市(臺北州)	七,五〇〇	七,五〇〇	〇	三
高雄市(高雄州)	五,七〇〇	五,七〇〇	〇	四
嘉義街(臺南州)	五,五〇〇	五,五〇〇	〇	五

馬公街(澎湖)	彰化街(彰化)	北港街(雲林)	西螺街(雲林)	淡水街(淡水)	中壢街(桃園)	宜蘭街(宜蘭)	南投街(南投)	埔里街(南投)	麻豆街(台南)	鹽水街(台南)	員林街(彰化)	大溪街(桃園)	斗六街(雲林)	屏東街(屏東)	鹿港街(彰化)	新竹街(新竹)	中市街(台中)
3,300	3,300	3,300	3,300	3,300	3,300	3,300	3,300	3,300	3,300	3,300	3,300	3,300	3,300	3,300	3,300	3,300	3,300
1,500	1,500	1,500	1,500	1,500	1,500	1,500	1,500	1,500	1,500	1,500	1,500	1,500	1,500	1,500	1,500	1,500	1,500
1,800	1,800	1,800	1,800	1,800	1,800	1,800	1,800	1,800	1,800	1,800	1,800	1,800	1,800	1,800	1,800	1,800	1,800

桃園街(新竹)	大甲街(台中)	花蓮港街(花蓮)	花東街(花蓮)	本表には人口二萬以上の市及街のみを挙げ、且つ附所在地たる東、花蓮港兩街を掲ぐ。
3,300	3,300	3,300	3,300	
1,500	1,500	1,500	1,500	
1,800	1,800	1,800	1,800	

二 内地其の他の都市との人口比較

(昭和五年十月一日現在)

長基富德張濱福廣	野陸山島南松岡北島
2,500	2,500
1,500	1,500
1,800	1,800

新竹及嘉義の兩街は昭和五年一月市制を施行せられたり。

高山	45,500
盛岡	42,600
宮城	38,300
八戸	35,000
新潟	33,000
米澤	32,000
花原	31,000
花野	29,000
東港	27,000

樺太は國勢調査結果速報に依る。

二三 農業戸數

臺灣の農業戸數は四十萬戸にして、總戸數の約五割を占め、農業者一戸當平均耕地面積は二町(二甲強)に當る。今之内地其の他と比較するに、總戸數に對する農業戸數の割合最も大なるは、朝鮮の七割三分にして、臺灣は第二位を占め、樺太は僅かに二割を以て最下位に在り。農業者一戸當平均耕地面積の最も大なるは、北海道の四町五段にして、關東州の三町四段、樺太の二町八段之に並ぎ、臺灣は第四位を占め、内地府縣は九段歩を以て最下位に在り。

内地府縣	農業戸數	總戸數百に付農業戸數	農業者一戸當平均耕地面積
朝鮮	3,700,000	91.8	3.0
臺灣	3,700,000	71.1	2.6
關東州	1,000,000	33.1	2.6
北海道	1,000,000	33.1	2.6
樺太	1,000,000	25.9	2.5
關東州(州内、鐵道附屬地)	1,000,000	25.9	2.5

本表は昭和四年末の事實なり。

北海道、内地府縣は農林省統計表に依る。

二四 耕地面積

臺灣の耕地は總面積の二割餘を占め、其の面積は八十一萬町歩(八十三萬甲)にして内、田三十九萬町歩(四十萬甲)、畑四十二萬町歩(四十二萬甲)なり。
 今之を内地其他と比較するに、總面積に對する耕地面積の割合最も大なるは、關東州の五割四分にして、臺灣之に次ぎ、朝鮮の二割はその第三位を占め樺太の八厘最も小なり。耕地の内、田の割合畑より大なるは内地府縣のみにして、樺太の如きは全然田を有せず。

内地府縣	耕地面積		百分比例	
	田	畑	田	畑
北海道	1,000,000	3,000,000	25%	75%
關東州	4,000,000	4,000,000	50%	50%
樺太	800,000	0	100%	0%
朝鮮	1,600,000	2,400,000	40%	60%
臺灣	3,900,000	42,100,000	8.3%	91.7%
總數	10,300,000	50,500,000	20.4%	79.6%

本表は昭和四年末の事實なり。
 朝鮮、樺太、關東州(州内、鐵道附屬地)は拓務省統計概要に依る。
 北海道、内地府縣は農林省統計表に依る。

二五 水利

臺灣に於ける埤圳の数は、七千六百七十四にして内、水利組合百五、公共埤圳三、認定外埤圳七千五百六十六なり。又其の灌溉排水面積は四十五萬甲にして内其の四割五分は水利組合の灌溉に屬す。

總	埤圳數	灌溉排水面積	灌溉排水面積百分比例
水利組合	150	18,750	41.7
公共埤圳	3	3,750	8.3
認定外埤圳	7,561	22,500	50.0
總計	7,714	45,000	100.0

本表は昭和四年度末現在の事實なり。

二六 農 産

臺灣の農産物は、昭和四年中の總生産價額二億六千二百萬圓にして内、普通作物一億五千二百萬圓、特用作物八千四百萬圓、園藝作物二千五百萬圓なり。
 更に之を作物別に觀るに、米は一億二千八百萬圓を以て第一位を占め、甘蔗は七千三百萬圓を以て之に次ぎ、甘藷の二千三百萬圓、蔬菜類の一千二百萬圓、バナナの六百六十萬圓、粗製茶の六百萬圓、鳳梨の二百四十萬圓、落花生の二百三十萬圓、柑橘の百九十萬圓、豆類の百三十萬圓等順次に那く。

總 類	生産價額	生産價額 百分比	作付面積	收穫高
普通作物	一,520,000,000	100%	甲	—
米(玄米)	1,280,000,000	84.2%	—	—
甘蔗	730,000,000	47.9%	—	—
甘藷	230,000,000	15.1%	—	—
豆類	600,000,000	3.9%	—	—
小麥	200,000,000	1.3%	—	—
其他	100,000,000	0.7%	—	—
特用作物	840,000,000	5.5%	—	—
園藝作物	2,500,000,000	16.4%	—	—

粗製茶 落草 烟麻 黄麻 苧麻 胡麻 泥花 香花 荳蔻 其 關 之 物 柑 橘 鳳梨 椰子 茶

總 類	生産價額	生産價額 百分比	作付面積	收穫高
粗製茶	600,000,000	3.9%	—	—
落草	200,000,000	1.3%	—	—
烟麻	100,000,000	0.7%	—	—
黄麻	100,000,000	0.7%	—	—
苧麻	100,000,000	0.7%	—	—
胡麻	100,000,000	0.7%	—	—
泥花	100,000,000	0.7%	—	—
香花	100,000,000	0.7%	—	—
荳蔻	100,000,000	0.7%	—	—
其 之 物	100,000,000	0.7%	—	—
柑 橘	190,000,000	1.2%	—	—
鳳梨	240,000,000	1.6%	—	—
椰子	180,000,000	1.2%	—	—
茶	1,500,000,000	9.8%	—	—

其
の
他

五
三
六
八

〇
三

一
?

三
四
六
七

二七畜産

臺灣の畜産物生産總額は、昭和四年に七千八百萬圓を算し内、家畜生産七千二百萬圓、家禽生産五百五十萬圓、牛乳四十七萬圓なり。
家禽生産中、豚は三千八百萬圓を以て第一位を占め、水牛の二千六百萬圓之に次ぐ。家禽生産中第一位を占むるは鶏の四百二十萬圓なり。

種類	生産額	生産額 百分比例
水牛	六四八二六	一〇〇
黄牛	三三〇三〇	五〇
雑種牛	三六六六六	五五
其の他の牛	一四三〇一	二二
豚	八〇〇〇〇	一一
山羊	一〇〇〇〇〇	一五
山の羊	七五〇〇〇	一一
其の他の	一七五〇〇	二六
鶏	五五二九三	七二
家畜	四一四一七	五八

製場種龍蒲籐竹木竹新川
 網 竹 眼
 原 料 椰 皮 肉 草 炭 材 材 材 類

品名	價 額	百 分 比 額
新川竹	3,366,920	100.0
木竹	4,433,320	131.8
竹	3,366,920	100.0
籐	1,571,600	46.4
蒲	1,571,600	46.4
龍	201,800	5.9
種	102,100	2.9
製場	68,700	2.0
椰皮	7,243	0.2
肉草	5,240	0.1
炭	3,350	0.1
網	3,350	0.1
原	3,350	0.1
料	3,350	0.1
椰	3,350	0.1
皮	3,350	0.1
肉	3,350	0.1
草	3,350	0.1
炭	3,350	0.1
材	3,350	0.1
材	3,350	0.1
材	3,350	0.1
類	3,350	0.1
總	3,366,920	100.0

臺灣の林産物生産總價額は、昭和四年に一千四百萬圓を算し内、用材の四百八十萬圓第
 一位を占め、薪材の三百三十萬圓、竹材の二百萬圓、木炭の百五十萬圓、龍眼肉の七十萬
 圓等順次に垂く。

二 八 林 産

牛 七 鷄 鳶
 而
 乳 鳥

品名	價 額	百 分 比 額
鷄	3,366,920	100.0
鳶	4,433,320	131.8
而	3,366,920	100.0
牛	1,571,600	46.4
乳	1,571,600	46.4
鳥	201,800	5.9
總	102,100	2.9

愛媛班月共
玉芝の
子黄絹桃他

八三三
三八三
四七三
二九三
四三三
〇
〇
〇
〇
〇

二九 鑛産

臺灣の鑛産總價額は、昭和四年に一千五百萬圓を算し内、石炭は總價額の六割七分、即ち一千萬圓を以て第一位を占め、金銅鑛は三百萬圓、金の六十萬圓、石油の四十萬圓等順次に重く。

總
石 炭 類
石 炭
洗 炭
石 炭
金 銅
石 炭
硫 銅
銀 銅
砂 金
揮 砂
金 銅
水 銀
鑛 鑛

産 額	價 額	百分比額
1,500,000,000	1,500,000,000	100.0
1,000,000,000	1,000,000,000	66.7
300,000,000	300,000,000	20.0
300,000,000	300,000,000	20.0
60,000,000	60,000,000	4.0
40,000,000	40,000,000	2.7
20,000,000	20,000,000	1.3
10,000,000	10,000,000	0.7
5,000,000	5,000,000	0.3
2,000,000	2,000,000	0.1
1,000,000	1,000,000	0.1
500,000	500,000	0.03
200,000	200,000	0.01

三〇 水 産

水産物の水産物額は、昭和四年には二千一百九十萬圓を算し内、水産物産物一千四百四十萬圓、養殖場漁獲物三百七十萬圓、水産製造物二百八十萬圓、製練二百萬圓なり。
 更に之を品別に視れば、鮭の二百五十萬圓第一位を占め、虱目魚の二百二十萬圓、鯛の二百萬圓、鱈の百五十萬圓、鯉の百二十萬圓等順次に続く。

品名	額	百分比
鮭	2,500,000	100.0
虱目魚	2,200,000	88.0
鯛	2,000,000	80.0
鱈	1,500,000	60.0
鯉	1,200,000	48.0
製練	2,000,000	80.0
水産製造物	2,800,000	112.0
養殖場漁獲物	3,700,000	148.0
水産物産物	4,400,000	176.0
水産物産物	4,400,000	176.0

製
 其 際 鱸 鱸 滑 資 鱧 水
 の 魚 鱒 仔 鱒 干 鱒 産
 他 魚 鱒 仔 鱒 鱒 節 物 他

九六五
 三〇七
 三〇三
 三〇三
 六八〇
 三六六
 一七
 三二
 一七
 三六
 三六
 三二
 〇三

〇七
 〇七
 〇一
 〇一
 〇一
 〇一
 一七
 一七
 一七
 一七
 一七
 一七
 一七

鯛 馬 鯛 草 鱈 武 養
 と 魚 魚 魚 魚 魚 魚 魚
 魚 魚 魚 魚 魚 魚 魚
 魚 魚 魚 魚 魚 魚 魚
 魚 魚 魚 魚 魚 魚 魚

三〇七
 〇七
 〇七
 〇七
 〇七
 〇七
 〇七
 〇七
 〇七
 〇七
 〇七
 〇七
 〇七

〇七
 〇七
 〇七
 〇七
 〇七
 〇七
 〇七
 〇七
 〇七
 〇七
 〇七
 〇七
 〇七

三一 工業

臺灣の工業生産總價額は、昭和四年に二億四千七百萬圓を算し内、砂糖の一億五千四百萬圓は群を抜いてその第一位を占め、再製茶の一千萬圓、帽子の六百八十萬圓、酒精の五百九十萬圓、木製品の四百七十萬圓、敷瓦及屋根瓦の四百六十萬圓、調合肥料の四百三十萬圓等順次に連ぐ。

品名	生産價額	生産價額 百分比例
總額	三,四七,六八〇	100.0
砂糖(稅抜)	一,五〇,八三三	四三.四
酒精(稅抜)	五八,三七三	一.七
再製茶	一〇,五二五	三.〇
原動機及其の附屬機械類其他	三,八五九	〇.一
木製品	四,〇三三	〇.一
セメント	三,三九七	〇.一
染料	八,九七	〇.〇
糊類	三,〇三三	〇.〇
煉瓦(耐火)	一,〇三三	〇.〇
煤類	一,〇三三	〇.〇

品名	生産價額	生産價額 百分比例
調合肥料	四,七二〇	一.四
金銀細工	三,九六五	〇.一
味噌及醬油	三,七八三	〇.一
植物油	三,五八七	〇.一
敷瓦及屋根瓦	四,〇三三	〇.一
金銀	一,七五〇	〇.〇
紙粉	三,七九八	〇.一
蠶(稅抜)	一,七五〇	〇.〇
糖類	三,八二二	〇.一
帽子	六,八二二	〇.二
靴子	一,三三三	〇.〇
製氷	一,三三三	〇.〇
竹器	一,三三三	〇.〇
鳳梨罐頭	一,三三三	〇.〇
板梨	一,三三三	〇.〇
紙糊	一,三三三	〇.〇
其他	一,三三三	〇.〇

三一糖業

臺灣の糖業は昭和五年期に於て、公稱資本金二億五千餘萬圓、作業工場數百五十三、作業能力四萬二千噸を有し、其の製糖高十三億五千萬斤に達す。就中新式製糖會社の數は十にして作業工場數四十八、作業能力四萬一千噸を有し、その製糖高十三億三千萬斤を算す。

總數	公稱資本金 前	工場數	作業能力 噸	製糖高 斤	製糖高 百分比
新式製糖會社	1,500,000,000	1	4,000	1,300,000,000	100.0
臺灣製糖	2,500,000,000	1	1,000	1,500,000,000	66.7
新興製糖	1,000,000,000	1	1,000	1,200,000,000	75.0
明治製糖	1,000,000,000	1	1,000	1,400,000,000	93.3
大日本製糖	5,000,000,000	1	1,000	3,000,000,000	60.0
鹽水港製糖	1,000,000,000	1	1,000	1,500,000,000	150.0
新高製糖	1,000,000,000	1	1,000	1,000,000,000	100.0
帝國製糖	1,000,000,000	1	1,000	1,000,000,000	100.0
昭和製糖	1,000,000,000	1	1,000	1,000,000,000	100.0
臺灣製糖	1,000,000,000	1	1,000	1,000,000,000	100.0
總計	17,500,000,000	11	11,000	13,500,000,000	100.0

新竹製糖	1,000,000,000	1	1,000	1,000,000,000	100.0
沙糖製糖	1,000,000,000	1	1,000	1,000,000,000	100.0
改良糖廠	1,000,000,000	1	1,000	1,000,000,000	100.0
舊式糖廠	1,000,000,000	1	1,000	1,000,000,000	100.0
昭和五年期とは昭和四年十一月より同五年十月に至る期間を謂ふ。					

三三 貿易

臺灣の貿易は之を外國貿易及内地貿易(臺灣内地間)の二種に分つべきも、今之を總括すれば明治三十年の三千一百萬圓より大正元年の一億二千五百萬圓に進みたり。大正二、三の兩年は少しく減退したるも、大正六年には二億圓案に上り、大正八年には更に三億圓案を突破し、大正十年及十一年は再び二億八千圓に減退せるも大正十二年には復た三億圓案に上り、昭和四年には四億七千萬圓に達し、人口一人當百七圓を算せり。

次に貿易總額に對する内外貿易の割合を視るに、内地貿易は常に過半數を占め少きも七割、多きは八割に達し、内地と臺灣とが國家經濟の見地よりして益々密接不離の有機的關係を増大しつゝあるは明白なる事實なり。

一 貿易總表

年	總額	指數	貿易總額		平均
			外國貿易	内地貿易	
大正元年	1,250,000,000	100	6,250,000,000	6,250,000,000	100
二年	1,250,000,000	100	6,250,000,000	6,250,000,000	100
三年	1,250,000,000	100	6,250,000,000	6,250,000,000	100
四年	1,250,000,000	100	6,250,000,000	6,250,000,000	100
五年	1,250,000,000	100	6,250,000,000	6,250,000,000	100

外國貿易

年	總額	指數	貿易總額		平均
			輸出	輸入	
大正元年	1,250,000,000	100	6,250,000,000	6,250,000,000	100
二年	1,250,000,000	100	6,250,000,000	6,250,000,000	100
三年	1,250,000,000	100	6,250,000,000	6,250,000,000	100
四年	1,250,000,000	100	6,250,000,000	6,250,000,000	100
五年	1,250,000,000	100	6,250,000,000	6,250,000,000	100
六年	1,250,000,000	100	6,250,000,000	6,250,000,000	100
七年	1,250,000,000	100	6,250,000,000	6,250,000,000	100
八年	1,250,000,000	100	6,250,000,000	6,250,000,000	100
九年	1,250,000,000	100	6,250,000,000	6,250,000,000	100
十年	1,250,000,000	100	6,250,000,000	6,250,000,000	100
十一年	1,250,000,000	100	6,250,000,000	6,250,000,000	100
十二年	1,250,000,000	100	6,250,000,000	6,250,000,000	100

同	同	同	昭	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
△	和	十	十	十	十	十	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	元	四	三	二	一
は	移	入	超	過	な	り															
4	3	2	元	4	3	2	1	9	8	7	6	5	4	3	2	1					
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
29,075	28,800	28,100	27,500	26,800	26,200	25,600	25,000	24,400	23,800	23,200	22,600	22,000	21,400	20,800	20,200	19,600	19,000	18,400	17,800	17,200	
29,075	28,800	28,100	27,500	26,800	26,200	25,600	25,000	24,400	23,800	23,200	22,600	22,000	21,400	20,800	20,200	19,600	19,000	18,400	17,800	17,200	
29,075	28,800	28,100	27,500	26,800	26,200	25,600	25,000	24,400	23,800	23,200	22,600	22,000	21,400	20,800	20,200	19,600	19,000	18,400	17,800	17,200	
29,075	28,800	28,100	27,500	26,800	26,200	25,600	25,000	24,400	23,800	23,200	22,600	22,000	21,400	20,800	20,200	19,600	19,000	18,400	17,800	17,200	
29,075	28,800	28,100	27,500	26,800	26,200	25,600	25,000	24,400	23,800	23,200	22,600	22,000	21,400	20,800	20,200	19,600	19,000	18,400	17,800	17,200	
29,075	28,800	28,100	27,500	26,800	26,200	25,600	25,000	24,400	23,800	23,200	22,600	22,000	21,400	20,800	20,200	19,600	19,000	18,400	17,800	17,200	
29,075	28,800	28,100	27,500	26,800	26,200	25,600	25,000	24,400	23,800	23,200	22,600	22,000	21,400	20,800	20,200	19,600	19,000	18,400	17,800	17,200	
29,075	28,800	28,100	27,500	26,800	26,200	25,600	25,000	24,400	23,800	23,200	22,600	22,000	21,400	20,800	20,200	19,600	19,000	18,400	17,800	17,200	
29,075	28,800	28,100	27,500	26,800	26,200	25,600	25,000	24,400	23,800	23,200	22,600	22,000	21,400	20,800	20,200	19,600	19,000	18,400	17,800	17,200	
29,075	28,800	28,100	27,500	26,800	26,200	25,600	25,000	24,400	23,800	23,200	22,600	22,000	21,400	20,800	20,200	19,600	19,000	18,400	17,800	17,200	

大	同	同	昭	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
正	和	十	十	十	十	十	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	元	四	三	二	一
元	は	移	入	超	過	な	り														
年	4	3	2	元	4	3	2	1	9	8	7	6	5	4	3	2	1				
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
29,075	28,800	28,100	27,500	26,800	26,200	25,600	25,000	24,400	23,800	23,200	22,600	22,000	21,400	20,800	20,200	19,600	19,000	18,400	17,800	17,200	
29,075	28,800	28,100	27,500	26,800	26,200	25,600	25,000	24,400	23,800	23,200	22,600	22,000	21,400	20,800	20,200	19,600	19,000	18,400	17,800	17,200	
29,075	28,800	28,100	27,500	26,800	26,200	25,600	25,000	24,400	23,800	23,200	22,600	22,000	21,400	20,800	20,200	19,600	19,000	18,400	17,800	17,200	
29,075	28,800	28,100	27,500	26,800	26,200	25,600	25,000	24,400	23,800	23,200	22,600	22,000	21,400	20,800	20,200	19,600	19,000	18,400	17,800	17,200	
29,075	28,800	28,100	27,500	26,800	26,200	25,600	25,000	24,400	23,800	23,200	22,600	22,000	21,400	20,800	20,200	19,600	19,000	18,400	17,800	17,200	
29,075	28,800	28,100	27,500	26,800	26,200	25,600	25,000	24,400	23,800	23,200	22,600	22,000	21,400	20,800	20,200	19,600	19,000	18,400	17,800	17,200	
29,075	28,800	28,100	27,500	26,800	26,200	25,600	25,000	24,400	23,800	23,200	22,600	22,000	21,400	20,800	20,200	19,600	19,000	18,400	17,800	17,200	
29,075	28,800	28,100	27,500	26,800	26,200	25,600	25,000	24,400	23,800	23,200	22,600	22,000	21,400	20,800	20,200	19,600	19,000	18,400	17,800	17,200	

三 内地貿易

総額 移入 移出 移入超過

三四 對手國別外國貿易

臺灣の外國貿易は大體に於て輸入超過を示す。而して對手國中、中華民國は累年主要の地位に在り。即ち輸出貿易總額に對する其の割合は少きも二割九分、多きは六割を占め、輸入貿易に於ては少きも三割四分、多きは五割七分を占む。

今昭和四年の外國貿易に就て觀るに、貿易總額九千八百萬圓、内、輸出額は三千三百萬圓にして、就中中華民國の一千八百萬圓最も多く、總額の五割三分に當り、關領印度の四百三十萬圓、香港の四百十萬圓、北米合衆國の四百萬圓等順次に並ぐ。輸入額六千五百萬圓中第一位を占むるは中華民國の三千萬圓にして、總額の四割五分に當り、英領印度の九百四十萬圓、獨逸の六百六十萬圓、英吉利及北米合衆國の三百九十萬圓、佛領印度支那の二百八十萬圓、關東州の二百二十萬圓等順次に並ぐ。

一輸 出

總額	昭和四年	同三年	同二年	同元年	大正十四年	同十三年	同元年
關東州	21,250,000	18,000,000	14,000,000	12,000,000	10,000,000	8,000,000	6,000,000
中華民國	1,800,000,000	1,800,000,000	1,800,000,000	1,800,000,000	1,800,000,000	1,800,000,000	1,800,000,000
香港	40,000,000	40,000,000	40,000,000	40,000,000	40,000,000	40,000,000	40,000,000
關領印度	400,000,000	400,000,000	400,000,000	400,000,000	400,000,000	400,000,000	400,000,000

暹羅 佛領印度支那 比律賓 佛領西貢 獨逸 英吉利 北米合衆國 其他

二輸 入

總額	昭和四年	同三年	同二年	同元年	大正十四年	同十三年	同元年
關東州	3,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000
中華民國	3,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000
佛領印度支那	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
關領印度	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
暹羅	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
英領印度	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000

海峽植民地及英領ボルネオ	300	250	250	250	250	250	250	250	250
英領印度支那	100	100	100	100	100	100	100	100	100
暹羅	100	100	100	100	100	100	100	100	100
波太利	100	100	100	100	100	100	100	100	100
英領吉利	100	100	100	100	100	100	100	100	100
英領北米	100	100	100	100	100	100	100	100	100
英領アメリカ	100	100	100	100	100	100	100	100	100
其他	100	100	100	100	100	100	100	100	100

三五 中華民國、香港及南洋貿易

臺灣の外國貿易中臺灣と最も密接の關係を有する中華民國、香港及南洋との貿易を再檢するに、年に依り多少の相異あるも、現世界狀勢より見るに益々其の重要性を加へつゝあり。即ち昭和四年に就て觀るに、輸出額は二千六百萬圓にして、輸入貿易總額の約七割九分を占め、輸入貿易は四千五百萬圓にして、輸入貿易總額の七割に當れり。

一 輸出

總額	昭和四年	同三年	同二年	同元年	大正十四年	同十三年	同元年
中華民國	1,500	1,200	1,000	800	700	600	500
香港	1,000	800	700	600	500	400	300
南洋	500	400	300	200	100	100	100

本表の南洋とは英領海峽植民地、英領ボルネオ、蘭領印度、比律賓、英領印度、佛領印度支那、暹羅及濠太利を謂ふ。以下同じ。

二 輸入

總額	昭和四年	同三年	同二年	同元年	大正十四年	同十三年	同元年
中華民國	1,000	800	700	600	500	400	300
香港	800	700	600	500	400	300	200
南洋	700	600	500	400	300	200	100

香港、南洋、中華民國、對外國貿易總額に對する割合

大正十年	同	同	同	同	同	同	同	同	同
十一年	同	同	同	同	同	同	同	同	同
十二年	同	同	同	同	同	同	同	同	同
十三年	同	同	同	同	同	同	同	同	同
十四年	同	同	同	同	同	同	同	同	同
昭和元年	同	同	同	同	同	同	同	同	同
二年	同	同	同	同	同	同	同	同	同
三年	同	同	同	同	同	同	同	同	同
四年	同	同	同	同	同	同	同	同	同

總額	1000000	1000000	1000000	1000000	1000000	1000000	1000000	1000000	1000000
中華民國	712	712	712	712	712	712	712	712	712
香港	288	288	288	288	288	288	288	288	288
南洋	0	0	0	0	0	0	0	0	0

南洋三比例

大正十年	同	同	同	同	同	同	同	同	同
十一年	同	同	同	同	同	同	同	同	同
十二年	同	同	同	同	同	同	同	同	同
十三年	同	同	同	同	同	同	同	同	同
十四年	同	同	同	同	同	同	同	同	同
昭和元年	同	同	同	同	同	同	同	同	同
二年	同	同	同	同	同	同	同	同	同
三年	同	同	同	同	同	同	同	同	同
四年	同	同	同	同	同	同	同	同	同

總額	1000000	1000000	1000000	1000000	1000000	1000000	1000000	1000000	1000000
中華民國	712	712	712	712	712	712	712	712	712
香港	288	288	288	288	288	288	288	288	288
南洋	0	0	0	0	0	0	0	0	0

三六 重要品別外國貿易

臺灣の外國貿易中輸出品の主要なるものは、茶、石炭、砂糖、樟腦、酒精等なり。今昭和四年に就て之を觀るに、茶は九百四十萬圓を以て第一位を占め、石炭の三百三十萬圓、酒精の二百五十萬圓、樟腦の百七十萬圓、鹽の百五十萬圓等順次に並ぶ。

次に輸入品の主要なるものは、豆油粕、米、杉材、硫酸アンモニウム、ガンニール、石油、大豆等にして、昭和四年には豆油粕の一千二百八十萬圓第一位を占め、米の一千萬圓、硫酸アンモニウムの八百四十萬圓、大豆の四百三十萬圓、ガンニールの二百九十萬圓、杉材の二百八十萬圓、石油の百五十萬圓、小麦の百二十萬圓等順次に並ぶ。

一 輸 出

品名	昭和四年	同三年	同二年	同元年	大正十三年	同十三年	同元年
茶	九三三	九三三	二六四	三三三	二二六	一〇五	六三
石炭	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三
砂糖	二二二	二二二	二二二	二二二	二二二	二二二	二二二
樟腦	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
酒精	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇
豆油粕	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
米	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
杉材	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
硫酸アンモニウム	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
ガンニール	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
石油	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
小麦	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

品名	昭和四年	同三年	同二年	同元年	大正十三年	同十三年	同元年
豆油	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
米	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
石炭	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
砂糖	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
樟腦	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
酒精	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
杉材	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
硫酸アンモニウム	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
ガンニール	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
石油	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
小麦	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

二 輸 入

品名	昭和四年	同三年	同二年	同元年	大正十三年	同十三年	同元年
豆油	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
米	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
石炭	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
砂糖	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
樟腦	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
酒精	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
杉材	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
硫酸アンモニウム	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
ガンニール	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
石油	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
小麦	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

三七 重要品別内地貿易

臺灣の内地貿易中移出品の主要なるものは、砂糖、米、バナナ、樟腦、樟腦油、鳳梨糖、鳳梨糖漿、糖、酒精、糖類等なり。今昭和四年に就て之を觀るに、砂糖は一億四千三百萬圓を以て第一位を占め、米の四千九百萬圓、バナナの八百四十萬圓、鳳梨糖漿の四百四十萬圓、鳳梨糖の三百八十萬圓、酒精の三百五十萬圓、樟腦油の三百萬圓、樟腦の二百六十萬圓、鮮魚介の二百十萬圓、模造バナナ製の二百萬圓等順次に並ぶ。

次に移入品の主要なるものは、綿織及絹織布、肥料、鐵、酒類、鹽、杉材及杉板、紙、小麦粉等にして、昭和四年には綿織及絹織布の千六百八十萬圓第一位を占め、鐵の九百萬圓、杉材及杉板の三百六十萬圓、紙の三百六十萬圓、小麦粉の三百十萬圓、鹽の三百萬圓、麥酒の二百七十萬圓、紙巻煙草の二百六十萬圓、海酒の二百二十萬圓、毛織物の二百萬圓等順次に並ぶ。

一 移出

品名	昭和四年	同三年	同二年	同元年	大正十四年	同十三年	同元年
砂糖	1,430,000,000	1,300,000,000	1,200,000,000	1,100,000,000	1,000,000,000	900,000,000	800,000,000
米	490,000,000	450,000,000	420,000,000	380,000,000	350,000,000	320,000,000	280,000,000
バナナ	840,000,000	780,000,000	720,000,000	660,000,000	600,000,000	540,000,000	480,000,000
鳳梨糖漿	440,000,000	400,000,000	360,000,000	320,000,000	280,000,000	240,000,000	200,000,000
鳳梨糖	380,000,000	340,000,000	300,000,000	260,000,000	220,000,000	180,000,000	140,000,000
酒精	350,000,000	310,000,000	270,000,000	230,000,000	190,000,000	150,000,000	110,000,000
樟腦油	300,000,000	260,000,000	220,000,000	180,000,000	140,000,000	100,000,000	60,000,000
樟腦	260,000,000	220,000,000	180,000,000	140,000,000	100,000,000	60,000,000	20,000,000
鮮魚介	200,000,000	160,000,000	120,000,000	80,000,000	40,000,000	0,000,000	0,000,000
模造バナナ製	200,000,000	160,000,000	120,000,000	80,000,000	40,000,000	0,000,000	0,000,000
綿織及絹織布	1,680,000,000	1,500,000,000	1,300,000,000	1,100,000,000	900,000,000	700,000,000	500,000,000
肥料	1,000,000,000	900,000,000	800,000,000	700,000,000	600,000,000	500,000,000	400,000,000
鐵	900,000,000	800,000,000	700,000,000	600,000,000	500,000,000	400,000,000	300,000,000
酒類	300,000,000	260,000,000	220,000,000	180,000,000	140,000,000	100,000,000	60,000,000
鹽	300,000,000	260,000,000	220,000,000	180,000,000	140,000,000	100,000,000	60,000,000
杉材及杉板	360,000,000	320,000,000	280,000,000	240,000,000	200,000,000	160,000,000	120,000,000
紙	360,000,000	320,000,000	280,000,000	240,000,000	200,000,000	160,000,000	120,000,000
小麦粉	300,000,000	260,000,000	220,000,000	180,000,000	140,000,000	100,000,000	60,000,000
麥酒	270,000,000	230,000,000	190,000,000	150,000,000	110,000,000	70,000,000	30,000,000
紙巻煙草	260,000,000	220,000,000	180,000,000	140,000,000	100,000,000	60,000,000	20,000,000
海酒	220,000,000	180,000,000	140,000,000	100,000,000	60,000,000	20,000,000	0,000,000
毛織物	200,000,000	160,000,000	120,000,000	80,000,000	40,000,000	0,000,000	0,000,000

三八 港別貿易

昭和四年に於ける臺灣の輸移出入貿易總額は四億八千萬圓にして之を港別に別るに、基隆の二億四千萬圓第一位を占め、總額の五割に當り、高雄の二億圓之に次ぎ四割二分を占め、安平の一千三百萬圓、淡水の四百萬圓を始め殘餘の諸港は之を合算するも尙僅かに總額の七分を占むるに過ぎず。

今之を内地其の他の諸港と比較するに、基隆は神戸、横濱、大阪、大連に次ぎ第五位を占め大連と釜山との中間に、高雄は第七位を占め仁川の上位にあり。更に安平は平壤と新潟との中間に、淡水は博多と那覇との中間に位す。

神 横 大 大 基 高 平

神 横 大 大 基 高 平

港名	總額	輸出	輸入
神	2,400,000,000	1,200,000,000	1,200,000,000
横	2,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000
大	2,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000
大	2,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000
基	2,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000
高	1,300,000,000	650,000,000	650,000,000
平	1,300,000,000	650,000,000	650,000,000
淡	400,000,000	200,000,000	200,000,000
水	400,000,000	200,000,000	200,000,000
新	300,000,000	150,000,000	150,000,000
博	300,000,000	150,000,000	150,000,000
安	300,000,000	150,000,000	150,000,000

安 新 博 淡 那

平 濁 多 水 新

港名	總額	輸出	輸入
安	300,000,000	150,000,000	150,000,000
新	300,000,000	150,000,000	150,000,000
博	300,000,000	150,000,000	150,000,000
淡	300,000,000	150,000,000	150,000,000
那	300,000,000	150,000,000	150,000,000
平	300,000,000	150,000,000	150,000,000
濁	300,000,000	150,000,000	150,000,000
多	300,000,000	150,000,000	150,000,000
水	300,000,000	150,000,000	150,000,000
新	300,000,000	150,000,000	150,000,000

臺灣及朝鮮の輸出中には移出を、輸入中には移入を含む。
 朝鮮、關東州は同統計表に依る。
 北海道、内地府縣は帝國統計年鑑に依る。

三九 財政

臺灣總督府特別會計が全く國庫の補助を受けずして、獨立の實を舉ぐるに至りしは、明治三十八年度なりき。而して同年度の歳入は僅かに二千五百萬圓に過ぎざりしが、爾來年と共に其の額を増大し、大正八年度には一億圓を突破し、大正九年度には一億一千九百萬圓に増額せしが、大正十年度より同十三年迄は五百萬圓内外の減少をなせるも、同十四年には一億二千萬圓に達し、尙昭和元年度には一億三千萬圓に増額し、同四年度には更に一億五千萬圓に達せり。

次に歳入中其の主要部分を占むるは、官業及官有財産收入にして、其の歳入總額に對する割合は、年に依り多少の高低あるも少きも三割九分、多きは五割九分を占む。

歳入は明治三十八年度の二千萬圓より、大正八年度の七千二百萬圓に増加し、更に大正十一年度には九千六百萬圓に増額せり。大正十二年度以後は八千萬圓に減退したりしも昭和元年度には再び九千萬圓に増額し、同四年度以後には一億二千萬圓に達せり。

次に歳入中其の主要部分を占むるは、官業及官有財産收入にして、其の歳入總額に對する割合は、年に依り多少の高低あるも少きも三割九分、多きは五割九分を占む。

歳入は明治三十八年度の二千萬圓より、大正八年度の七千二百萬圓に増加し、更に大正十一年度には九千六百萬圓に増額せり。大正十二年度以後は八千萬圓に減退したりしも昭和元年度には再び九千萬圓に増額し、同四年度以後には一億二千萬圓に達せり。

年度	總額	租税	官業及官有財産收入	其他	指數	歲入百分比例	歲出指數
明治三十八年度	20,000,000	12,000,000	8,000,000	0	100	100	100
大正元年度	40,000,000	20,000,000	15,000,000	5,000,000	200	200	100
同 六年度	90,000,000	45,000,000	30,000,000	15,000,000	450	450	100

年度	總額	租税	官業及官有財産收入	其他	指數	歲入百分比例	歲出指數
同 七年度	100,000,000	50,000,000	35,000,000	15,000,000	500	500	100
同 八年度	130,000,000	65,000,000	45,000,000	20,000,000	650	650	100
同 九年度	160,000,000	80,000,000	55,000,000	25,000,000	800	800	100
同 十年度	190,000,000	95,000,000	65,000,000	30,000,000	950	950	100
同 十一年度	220,000,000	110,000,000	75,000,000	35,000,000	1,100	1,100	100
同 十二年度	250,000,000	125,000,000	85,000,000	40,000,000	1,250	1,250	100
同 十三年度	280,000,000	140,000,000	95,000,000	45,000,000	1,400	1,400	100
同 十四年度	310,000,000	155,000,000	105,000,000	50,000,000	1,550	1,550	100
同 十五年度	340,000,000	170,000,000	115,000,000	55,000,000	1,700	1,700	100
同 十六年度	370,000,000	185,000,000	125,000,000	60,000,000	1,850	1,850	100
同 十七年度	400,000,000	200,000,000	135,000,000	65,000,000	2,000	2,000	100
同 十八年度	430,000,000	215,000,000	145,000,000	70,000,000	2,150	2,150	100
同 十九年度	460,000,000	230,000,000	155,000,000	75,000,000	2,300	2,300	100
同 二十年度	490,000,000	245,000,000	165,000,000	80,000,000	2,450	2,450	100
同 二十一年度	520,000,000	260,000,000	175,000,000	85,000,000	2,600	2,600	100
同 二十二年度	550,000,000	275,000,000	185,000,000	90,000,000	2,750	2,750	100
同 二十三年度	580,000,000	290,000,000	195,000,000	95,000,000	2,900	2,900	100
同 二十四年度	610,000,000	305,000,000	205,000,000	100,000,000	3,050	3,050	100
同 二十五年	640,000,000	320,000,000	215,000,000	105,000,000	3,200	3,200	100

本表中昭和四年度迄は決算、昭和五年度は豫行豫算なり。

四〇專賣

臺灣の專賣は現在、阿片、食鹽、樟腦、煙草及酒の五種なるが、就中酒は大正十一年七月以降の實施とす。最近十八年間に於ける賣渡價額を觀るに、大正元年度には一千七百萬圓なりしが、大正六年度には二千萬圓を越ゆるに至り、更に大正九年度には三千萬圓を突破したるも、同十年度には經濟界の世界的不況に伴ひ、樟腦の如きは特に前年度の一千萬圓より五百萬圓に激減したる爲、總額に於て二千五百萬圓に低下せしが、大正十一年度には稍や景況を回復したると、酒專賣實施の結果總額三千四百萬圓に達し、大正十二年度には四千萬圓を突破し、大正十四年度には四十五萬圓に増加せり。

最近人造樟腦の需用旺盛となり是が對策上樟腦に關する事項は一般に公表せざるに依り、昭和元年度以後の賣渡總額には樟腦に關するものを控除せる爲、大正十四年度に比し著しく減額せるも、各種類別に之を觀れば阿片煙膏を除く外は概ね増收の趨勢に在り。

大正元年度
二年度
三年度
四年度
五年度
六年度

賣渡總額	1,700,000
阿片煙膏	1,000,000
食鹽	1,000,000
樟腦	1,000,000
煙草	1,000,000
酒	1,000,000

同同同同大正
同同同同元
同同同同二
同同同同三
同同同同四
同同同同五
同同同同六
同同同同七
同同同同八
同同同同九
同同同同十
同同同同十一
同同同同十二
同同同同十三
同同同同十四
同同同同十五
同同同同十六
同同同同十七
同同同同十八
同同同同十九
同同同同二十

樟腦及樟腦油	1,000,000
食鹽	1,000,000
阿片煙膏	1,000,000
煙草	1,000,000
酒	1,000,000
指數	100

但し勸業銀行支店元金は毎月末本店勘定の平均額なり。
△は換損金なり。

四二物 價

臺灣の物價は世界大戰の影響を受くること比較的少かりしも、戰局の進展に伴ひ、大正七年頃より著しき昂騰を示し、同九年にはその絶頂に達したりしが、我國戰時好況の餘波を受けて、生産過剰と大衆購買力の減退の爲不況の嵐下に置かれるに至り、同十年以降は低落歩調を辿り、同十三年の一時的少康を見たりと雖も世界の不況、銀價暴落、其他諸種の原因に依り益々其の歩調を強め最近に至りても此の趨勢は不矯下行線上を走るものゝ如し、即ち臺北市に於ける最近十八箇年の主要なる生活必需品の物價指數はよくその趨勢を示せり。

大正二年
同 三年
同 四年
同 五年
同 六年
同 七年
同 八年
同 九年

米(白)	150	160	170	180	190	200	210	220	230	240	250	260	270	280	290	300
糖(甘)	100	110	120	130	140	150	160	170	180	190	200	210	220	230	240	250
麵(太)	100	110	120	130	140	150	160	170	180	190	200	210	220	230	240	250
油(菜)	100	110	120	130	140	150	160	170	180	190	200	210	220	230	240	250
肉(牛)	100	110	120	130	140	150	160	170	180	190	200	210	220	230	240	250
豚(肉)	100	110	120	130	140	150	160	170	180	190	200	210	220	230	240	250
木炭	100	110	120	130	140	150	160	170	180	190	200	210	220	230	240	250
薪	100	110	120	130	140	150	160	170	180	190	200	210	220	230	240	250

同	同	同	昭	同	同	同	同	同
和	十	十	十	十	十	十	十	十
元	三	三	三	三	三	三	三	三
年	年	年	年	年	年	年	年	年
四	三	二	元	同	同	同	同	同
年	年	年	年	年	年	年	年	年
三	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一
三	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一
三	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一
三	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一

四三教 育

臺灣の教育は大正十一年二月發布の臺灣教育令に依り、初等教育を除くの外は、悉く内
 課人共學の制を採るに至り、昭和四年度に初等教育機關たる小、公學校の八百八十八校、
 児童二十六萬五千人、高等普通教育機關たる高等學校、中學校及高等女學校の二十三校、生
 徒一萬百人、師範學校の四校、生徒二千二百人、實業教育機關たる實業補習學校、農林學校、
 農業學校、工業學校、商業學校の三十八校、生徒三千八百人、專門教育機關たる醫學專門
 學校、帝國大學附屬農林專門部、高等商業學校の三校、生徒七百七十人、帝國大學一校、
 學生百人、私立各種學校十八校、生徒二千八百人、書房百六十、生徒五千八百人あり。
 次に初等教育機關を内地其の他と比較するに、人口千に對する小學校児童数は、北海道
 の百七十六人最も多く、朝鮮の百三十八人最も少く、我臺灣は百三十七人を以て朝鮮、關東
 州の上に在り。又臺灣の公學校、朝鮮の官公私立普通學校、樺太の出入教育所及關東州の
 官立公學校並に公立普通學校児童の人口千に對する割合は、樺太の九十四人最も多く、我
 臺灣は五十六人を以て之に並ぎ、朝鮮は僅かに二十五人を以て最下位に在り。

一 教育機關 (昭和四年度)

帝國大學	一	一	二	一
醫學專門學校	一	一	一	一
帝 國 大 學	一	一	一	一
醫學專門學校	一	一	一	一
學校數	一	一	一	一
教員數	三	三	三	三
學生、生徒	一	一	一	一
又(兒童數)	一	一	一	一
教員一人に付學	一	一	一	一
生、生徒(兒童)	一	一	一	一
數	一	一	一	一
又	一	一	一	一



學 校 種 別	校 數	教 員 數	兒 童 數	均一校平 均児童	教員一人 に付児童	人口千に 付児童
帝國大學附屬農林專門部	1		13		13	0.2
高等商業學校	1		6		6	0.1
高等學校	1		50		50	0.7
師範學校	10		1,330		133	1.8
中 等 女 學 校	3		330		110	1.4
高 等 農 業 學 校	3		450		150	2.0
農 業 學 校	1		20		20	0.3
農 業 補 習 學 校	1		60		60	0.8
商 業 學 校	1		20		20	0.3
實 業 補 習 學 校	3		120		40	0.5
小 學 校	13	13	130	10	10	1.3
私立各種學校	1		30		30	0.4
附 屬 房						

學校數(小、公學校は分校場を含む)は年度末現在、教員、學生、生徒(児童)は三月一日現在なり。教員には兼務者を含む。

二 内地其他の初等教育比較

學 校 種 別	校 數	教 員 數	兒 童 數	均一校平 均児童	教員一人 に付児童	人口千に 付児童
小 學 校	13	13	130	10	10	1.3
公 學 校						
關 東 州	1	1	100	100	100	1.0
關 東 州	1	1	100	100	100	1.0
關 東 州	1	1	100	100	100	1.0
關 東 州	1	1	100	100	100	1.0
關 東 州	1	1	100	100	100	1.0

公學校に就て觀るに朝鮮は官公私立普通學校、樺太は土人教育所、關東州(州内)は官立公學校及公立普通學校の事實なり。
臺灣の就學児童率は小學校に在りては内地人のみを、公學校に在りては本島人及蕃人(平地)に就き算出す。

公學校の關東州に在りては中華民國人のみに就き算出す。
 臺灣の兒童は昭和五年三月一日現在なり。
 朝鮮は昭和四年度末(兒童は昭和五年三月一日)現在にして拓務省統計概要に依る。
 樺太は昭和五年三月一日現在にして拓務省統計概要に依る。
 關東州(州内、鐵道附屬地、領事館)は昭和四年末現在にして同廳統計書に依る。
 北海道、内地府縣は昭和二年度末(兒童は昭和三年三月一日)現在にして帝國統計年鑑に依る。

四四 衛生機關

臺灣には昭和四年末現在、官立十三、公立十七、私立九十八、計百二十八の醫院と、一千二百名の醫師(内、齒科醫師八十五名)と、三百八十名の醫生と、一千二百名の産婆を有す。醫師、醫生一人に對する人口は全島平均二千八百四十四人にして、その割合の最も少きは花蓮港廳の二千四十五人最も多きは澎湖廳の七千人なり。

總數	醫院		醫師及醫生		産婆	千人に對する人口
	官立	公立	醫師	醫生		
北竹州	三	六	一〇	一〇	一三	二八
新竹州	一	一	一〇	一〇	一三	二八
桃園州	一	一	一〇	一〇	一三	二八
高雄州	二	二	一〇	一〇	一三	二八
高雄州	二	二	一〇	一〇	一三	二八
高雄州	二	二	一〇	一〇	一三	二八
花蓮港廳	一	一	一〇	一〇	一三	二八
澎湖廳	一	一	一〇	一〇	一三	二八
總數	一三	一七	一〇八	一〇八	一三六	二八

醫生とは明治三十四年府令第四十七號臺灣醫生免許規則に依り免許を得て其の管轄

内に於て醫師を棄と爲す者を削ふ。
本表の外藥劑師百十二名、藥種商二千九百六十四名有り。

四五水道

臺灣に於ける既設水道(簡易水道を含む)の總數は、陸軍省所管ハロン、玉里(但し玉里庄へ給水の分は表中に含む)、卑南及總督府所管恒春種番支所等消費水量不明ものを除き昭和四年末には七十箇所、年未現在給水戸數專用枠三萬八千九百六十六戸、共用枠戸數二萬七千七百六十四戸にして其の消費水量は消費水量不明ものを除き、(臺東、花蓮港兩三處下に於ける水量の大多數は簡易水道にして其の消費水量は不明なり)計量供給一千六百十萬立方米、放任供給一千七百二十萬立方米なり。

年未現在

年中消費水量(立方米)

總 新 中 南 高 東 花 北 州 州 州 東 連 池 廳	水道數		總 數	計量供給	放任供給
	專用枠 戸數	共用枠 戸數			
北 州 廳	63	3,000	3,063	3,063	1,712,153
新 中 州	2	1,000	1,002	1,002	1,712,153
南 州	1	3,000	3,001	3,001	1,712,153
高 州	5	2,000	2,005	2,005	1,712,153
東 州	5	2,000	2,005	2,005	1,712,153
花蓮 池 廳	6	2,000	2,006	2,006	1,712,153
總 計	79	11,000	11,079	11,079	7,180,000

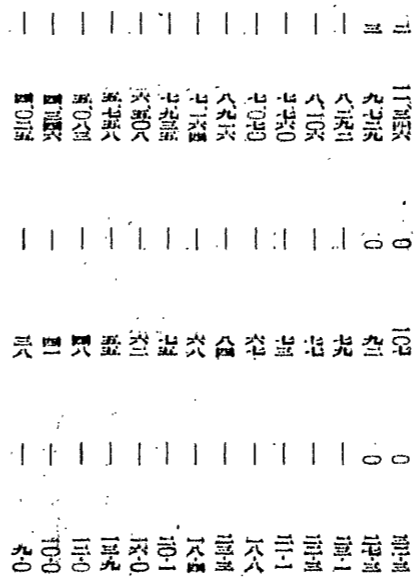
年中消費水世の新竹州は新竹水道、奉東廳は奉東水道、花蓮港廳は花蓮港水道のみ
の事實なり。

四六 ベストとマラリア

臺灣は一般に不健康地の如く解せらるゝも、衛生設備の完成と衛生思想の普及と共に、
近年其の面目を一新し、ベストの如き大正七年以來全く之れが發生を見ず。又マラリアの
如きも其の死亡数は年に依りて増減ありと雖も、一般に減退の傾向を示し、明治三十九年
に於て人口萬に付死亡數三千四百三十分なりしものが、昭和四年には九人に減退し、其の實
數に於ても同年間に六割二分を減じたり。

年	死亡實數		指數		人口萬に付死亡	
	ベスト	マラリア	ベスト	マラリア	ベスト	マラリア
明治三十九年	10,331	10,331	100	100	34.3	34.3
同四十年	11,711	11,711	114	114	39.0	39.0
同四十一年	10,200	11,710	100	114	33.7	39.0
同四十二年	10,331	10,331	100	100	34.3	34.3
同四十三年	9,100	9,100	88	88	30.3	30.3
同四十四年	7,900	7,900	77	77	26.9	26.9
大正元年	6,900	6,900	67	67	23.6	23.6
同二年	6,900	6,900	67	67	23.6	23.6
同三年	8,800	8,800	86	86	31.3	31.3
同四年	10,330	10,330	100	100	34.3	34.3

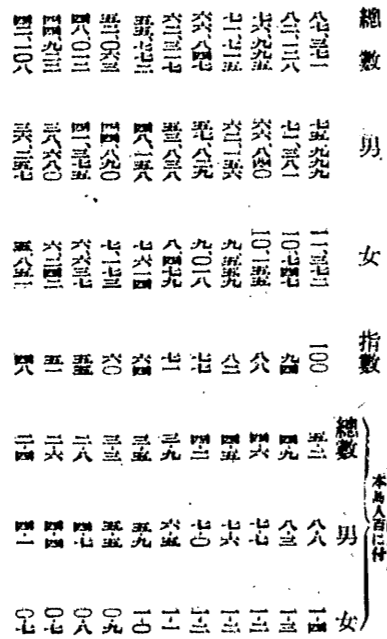
同 同 同 昭 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 和 十 十 十 十 十
 四 三 二 元 四 三 二 一 九 八 七 六 五
 年 年 年 年 年 年 年 年 年 年 年 年 年 年



四七 阿片吸食特許者

臺灣總督府は阿片問題に就ては嚴禁主義を避けて漸禁の方針を執り、阿片癮者と認むる者に限り其の吸食を特許し、漸次之が絶滅を期し、逐年豫期の目的の到達に近づきつゝあり。即ち之を最近十九年間に就て觀るに、阿片吸食特許者(本島人)の數は大正元年の八萬七千人より二萬三千人に減少したり。

大 正 元 年
 同 二 年
 同 三 年
 同 四 年
 同 五 年
 同 六 年
 同 七 年
 同 八 年
 同 九 年
 同 十 年
 同 十 一 年



同十二年	五,四三三	五,四六八	三三	五	〇六
同十三年	五,三〇七	五,二八二	二五	五	〇六
同十四年	五,七〇〇	五,七〇〇	二七	五	〇六
昭和元年	三,四〇〇	三,四〇〇	一六	五	〇六
同二年	三,四〇〇	三,四〇〇	一六	五	〇六
同三年	三,四〇〇	三,四〇〇	一六	五	〇六
同四年	三,四〇〇	三,四〇〇	一六	五	〇六
同五年	三,四〇〇	三,四〇〇	一六	五	〇六

本表は各年十二月末日現在にして本島人のみの事實なり。

四八 鐵道

臺灣の鐵道は、昭和四年度末には官設鐵道(阿里山及羅東森林鐵道を含む)の營業哩數六百二十哩に達し、外に私設鐵道一千四百哩を有す。私設鐵道は主として製糖會社の經營する所にして内、營業線は三百餘哩なり。

今之を内地其他と比較するに、百方に里に付鐵道營業線の哩數は、關東州の二百八十四哩最も多く、我臺灣の七十八哩之に過ぎ、樺太の十三哩最も少し。更に人口當に付哩數は樺太の十二哩最も多く、朝鮮は一哩にして最も少く、臺灣は二哩二分を以て内地の上にいる。

營業線路延長

總數	官設	私設	に百方に里付	に人口當付
朝鮮、樺太、關東州は昭和四年度末現在にして同應統計畫に依る。	八,四〇〇	三,六〇〇	三三	二九
内地	三,三〇〇	一,七〇〇	二五	二二
關東州	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一六	一六
樺太	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一六	一六
朝鮮	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一六	一六

内地道府縣は昭和三年度より現在の開業線に於て帝國統計年鑑に依る。人口萬に付哩數は内地道府縣昭和四年十月一日推計人口に依り算出せり。臺灣の營業線路延長の百方里に付哩數及人口萬に付哩數は孰れも蕃地の事實を含まず。

四九 郵便、電信、電話

臺灣に於ける郵便、電信、電話の現況を觀るに、昭和四年度に於て通常郵便は引受六千六百三十萬、配達七千七百萬、電信は發信及著信各百五十萬、爲替は振出二千九百八十萬圓、拂渡千七百六十萬圓、貯金預入一千七百萬圓、拂戻一千四百萬圓、貯金現在一千五百萬圓、振替貯金口座受入九千三百萬圓、拂出九千三百萬圓、現在六十五萬圓なり。又同年度末現在電話加入者數は一萬二千、年度中加入者發信通話數は五千八百萬なり。今之を内地其の他と比較するに、人口十に對する割合は通常郵便引受、電報發信、爲替振出及貯金預入を通じて最多數を示すは樺太にして、貯金預入を除いては、朝鮮最少數を示す。又人口十に付電話加入者數の最も多きは關東州、最も少きは朝鮮にして、同加入者一に付通話數の最も多きは關東州、最も少きは内地道府縣なり。

一 郵便、電信、爲替、貯金及電話

通常郵便	人口十に對する	發信	著信	人口十に對する
電信	人口十に對する	發信	著信	人口十に對する
爲替	人口十に對する	發信	著信	人口十に對する
貯金	人口十に對する	發信	著信	人口十に對する
電話	人口十に對する	發信	著信	人口十に對する

電 話	振替貯金			貯 金			爲 替	
	加入者 に對する 付入者 の數	加入者 の數	加入者 の數	預入者 に對する 預入額	預入者 に對する 預入額	預入者 に對する 預入額	振入額	振出額
477	27	213	562	9,908,900	17,934,500	17,934,500	6,600,000	1,051,000

二 内地其の他との比較 (昭和四年度)

内地	人口十に對する			電 話		
	普通郵便 便受	電報 發信	振替貯金 預入	加入者に對する 付入者數	加入者に對する 付入者數	加入者に對する 付入者數
朝鮮	1,677	33	6,600	27	213	562
關東	1,677	33	6,600	27	213	562
關西	1,677	33	6,600	27	213	562
關東	1,677	33	6,600	27	213	562
關西	1,677	33	6,600	27	213	562
關東	1,677	33	6,600	27	213	562
關西	1,677	33	6,600	27	213	562
關東	1,677	33	6,600	27	213	562
關西	1,677	33	6,600	27	213	562

五〇 警察官署及職員

臺灣の地方警察機關數は昭和四年末現在に依れば、州警務部五、廳警務課三、警察署六、郡警務課四十五、支廳十、派出所及駐在所千五百十にして、同職員の數は警視二十八、警部及警部補五百二十二、巡查七千二百六十八なり。

今之を内地其他と比較するに、一方里に對する巡查の數は、關東州の十一人最も多く、臺灣は三人を以て之に墮ぎ、巡查一人に付人口は北海道の千二百九十九人第一位を占め、朝鮮の千二十八人、内地府縣の千百十二人、臺灣の六百三十八人、樺太の六百三十七人、關東州の三百四十八人等順次に墮ぐ。

内地府縣	派出所	警察署	警務部及警部補		巡查		一方里に付人口
			警視	警部及警部補	巡查	巡查	
關東州	1	3	2	150	53	734	11
朝鮮	1	3	2	150	53	734	11
樺太	1	3	2	150	53	734	11
臺灣	1	3	2	150	53	734	11
北海道	1	3	2	150	53	734	11
内地府縣	1	3	2	150	53	734	11

本表巡查一人に付人口中臺灣の分は蕃地居住の蕃人を算入して算出す。

臺灣の警察署には郡役所警察隊及支廳を含む。
 關東州の民政支署は警察分署として稱上す。
 朝鮮、樺太、關東州(州内、鐵道附屬地、領事館)は同應統計書に依る。
 北海道、内地府縣は帝國統計年鑑に依る。

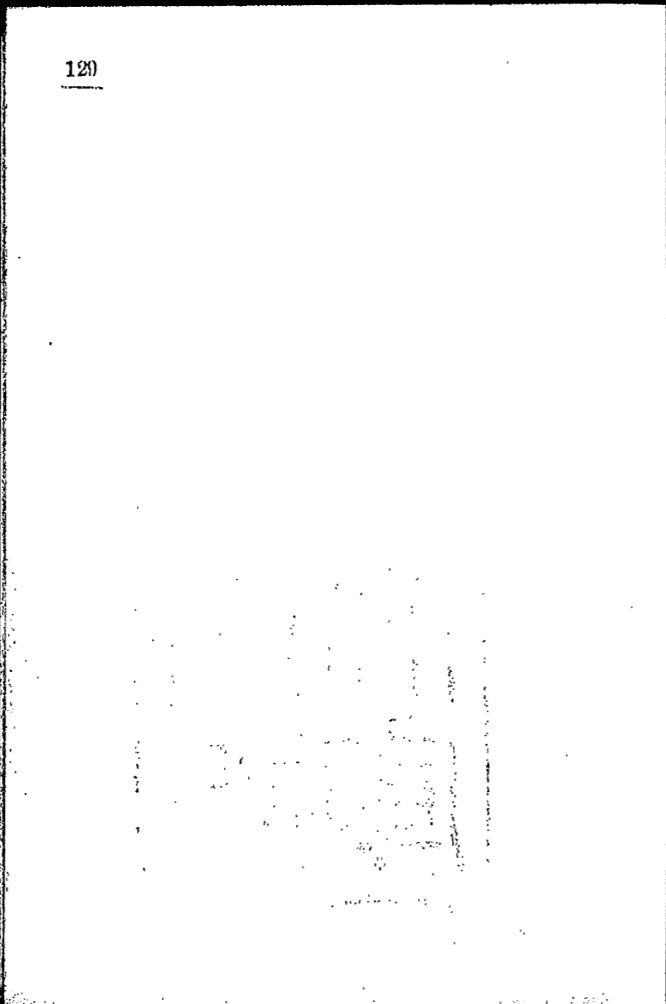
五一 最近十八年間の進歩

人	地				口
	内地	本島	外島	總計	
大正元年	3,521,700	2,375,250	3,333,330	6,137,730	7,212,300
昭和四年	4,848,700	3,075,000	4,967,500	6,212,200	8,001,100
大正元年を さしての増減	1,327,000	700,000	1,634,200	2,074,500	800,000

人	耕				口
	内地	本島	外島	總計	
大正元年	3,521,700	2,375,250	3,333,330	6,137,730	7,212,300
昭和四年	4,848,700	3,075,000	4,967,500	6,212,200	8,001,100
大正元年を さしての増減	1,327,000	700,000	1,634,200	2,074,500	800,000

總額	歲歲	財	專	製	糖	工	水	鐵
額	出	入	政	易	易	易	易	易
170,692.00	21,686.00	63,566.00	2,168.00	3,566.00	2,168.00	2,168.00	2,168.00	2,168.00
170,692.00	21,686.00	63,566.00	2,168.00	3,566.00	2,168.00	2,168.00	2,168.00	2,168.00

鐵	道	大	高	專	師	實	中	公	小	教	阿	食	樟	煙	酒
道	生	學	等	門	範	業	等	學	學	育	片	鹽	腦	草	發
11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11



官設鐵道線路延長
 運入(乘客貨金)
 私設鐵道線路延長
 郵便、電信及電話
 通常郵便引受通數
 電報渡信通數
 爲替振出金額
 貯金預入金額
 電話加入者
 電話通話度數

三三、八〇〇圓
 三、五八〇圓
 〇、八〇〇圓
 〇、五三三圓
 九、〇三三圓
 二、〇九〇圓
 三、六二〇圓
 三、七六六圓
 一、七三三圓

三三、八〇〇圓
 三、五八〇圓
 〇、八〇〇圓
 〇、五三三圓
 九、〇三三圓
 二、〇九〇圓
 三、六二〇圓
 三、七六六圓
 一、七三三圓

昭和六年九月十八日印刷
昭和六年九月二十日發行

臺灣總督府

臺北府大正町三丁目三十七番地
印刷人 塚川 首

臺北府榮町四丁目三十二番地
印刷所 臺灣日日新報社